大陸

女鑑第貳百壹號

目録

烈女以幾子



廉潔のこゝろ

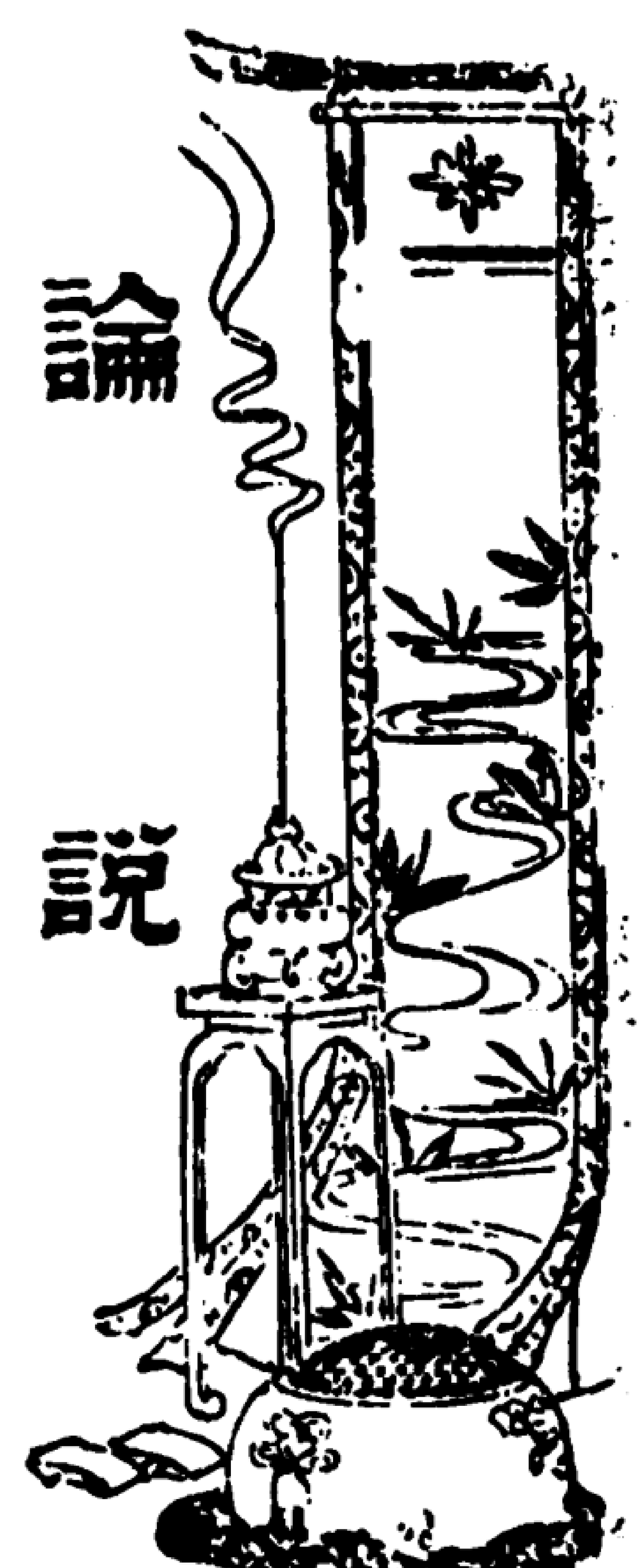
廉は、本、稜角の義にて、物體の、正しく成形し、廉角截然として亂れざる意にて、潔は、水の、純粹淸淨にして、一點の汚物を含まざる意なり。共に、人の言行、擧措、儼正端直にして、毫も、不正汚濁の形跡なきことを形容せる語なり。この心を養ふにはまづ物品授受の上より始むるをよしとす。平日、朋友と相交る際に於いて、假令、如何なる微物たりとも、受くべき理なきときは取らず、又、物品を分つ時などに、其の多き方、善き方を貪らざる等より始めて、漸に、他の行爲に進み、理に非ざれば動かす、義にあらざれば爲す、利慾に惑ふことなく、災害に怖るゝことなく、必、理に處して安んずる習慣を養ふへし。

抑、人の、人たる所以は、形體官能の備具にあらずして、行爲心術の、正誠高潔なるにあり。苟、行爲、道に違ひ、心術正しからざるものは、既に、人たる所以を失する者にて、其の耻づべきこと、支體不具者と、同日に語るべからず。人、誰

か、恥辱を快とする者あらん。快とせずして、之を行ふは、是、其の恥たることを知らざるなり。蓋、恥辱賤悪等は、人生品行の最下層を劃限して、其の放逸を防ぐ所以の障壁なり。然るを、之を破りて、其の界外に出で、情に任じ、慾を恣にする者は、人といふべからず。智識、何の爲ぞ。才藝、何の用ぞ。此の如きものは、啻に、世人に擯斥賤悪せらるゝのみならず、心、常に、齷齪として、自苦しみ、身、必、災害に罹るべし。何ぞ、廉潔者の、心、常に、綽々として義を樂み、富榮、是求めずして、自然に至るものに如かんや。

斯等の事は、始に於いて、最も之を愼まざるべからず。若し、一たび、破廉恥の事あるときは、終身、之を拭滅すべからざること、恰、一肢一官を失ひて、畢生の不具者となるが如きものなれば決して、忽にすべからざるなり。





論説

日本女子今後の覺悟（十六）

三輪田眞佐子

凡そ、女子の交際するに當りて、最も乏欠を感ずるものは、話柄ならんかし。思ふに、男子は外事を主るものなれば、おのづから眼界廣く、聞知することも亦多からん。されども、女子は閨門を出づる機會も少く、たとへ、相當する社會の業務に從事するものなりとも、その見聞の、男子に及ばざるは事實なるを以て、通例の女子は、談話數刻に至らんか。忽ち思想盡きて、言ひ出づべき言の葉草なかるべし。

これを以て、女子の相會合するに當りては、その年齡若きものは、戯れて笑ふに止まるか。さなくば、他人の身上を批評して話柄となし、辛うじて、一坐の興を維持する觀あり。されど、戯れて笑ふは、少女の時代には許すべきも、既に、人の婦人とも呼ばるべき時代に於いて、愼むべきわざならじ。況して、交際の話柄として、人を毀譽し褒貶するごときは、女德を害ふことの最も甚しきものなれば、固く禁ずべきことにこそ。

然らば、如何にしてかゝる欠點を補ふを得べき。蓋し、話柄に窮するは、思想の豐かならざるに由るべければ、須らく、思想を養ふべし。されば、おのづから高尙なるのみならず、双方の補益となるべき話柄、混々として盡くることなかるべし。故に、今後交際繁き世に立ちて、口もて禍を買はざるを願ふ女子は、思想を富ますばかり必要なるは

なし。

交際上樞要なる思想を養はんには、先、文學を修むるに若くはなし。即ち、文學の趣味を積みて、以つて、衆人に向ふときの話柄とすべし。そもそも、文學といふものは、宇内の美妙を寫し、人情の韻致を載するものなれば、苟も、文學思想ならんか。その言ふところ高雅なるを以て、他人の感情を害することなかるべく、その語ることに由りて、血あり涙ある人たるを知るべければ、誰か、これに接してゆかしき思なからん。わきて、春風秋月の折につけても、その言錦繍の色あり、その語金玉の聲あるべし。などか、人の耦をことほぐに辭を過らん。人の憂を解くに詞を失はんや。亦文學の趣味ある人は、品性高きを以て、門地低く財寶乏しきも、高位高官の人と、平等の交際を爲すことを得べし。若し、その容貌愚なるが如しといへども、文學の徳内に積るものありて、おのづから、外に現はるれば、忽ち、人をして敬愛の情を起さしむるに足らん。むかし、成源僧正連歌を好みければ、その山内の僧、ことごとくその餘波を受けて、しき島の道を知りけり。一日常在といふ僧、法勝寺の櫻のもとに佇みけるを、若き女房四五人うちむれて、花を賞しけるが、件の僧を見て、あれも人なみに花みんとてあるにやと嘲りて、これに向ひて、僧君よ。この花一枝折りて給べといへりければ、この僧、うち案じて、

山がつはをりてこそしらねさくら花
　さげば春かとおもふばかりぞ

といひかけたりけり。これを聞くや、妻に笑ひつる女房ども、答ふること能はずして、仰天のまゝ、立ち去りたりけりとかや。これ、僧を笑ふものをして、反りて、後の世の笑を招かしむる所以のも

のは、文學の趣味ありければこそ。今や、萬山みな花の候とはなりぬ。定めて、三々五々打むれて、花をながむる乙女もあらん。老婆もあらん。果して、如何なる文學思想あるか。

茲に、注意すべきは、如何に文學思想ある女子なりとも、われこそ風流なれと言はんばかりの動作あるものは、眞の文學趣味ある女子といふべからず。全く、俗物たるを免れず。おのれは、一見して一丁字も知らざるが如き擧止ある女子にして、唯文學の德を以て、ゆかしき女子こそ望ましけれ。故に、交際に文學を必要とするは、思想を養はんために止まりて、文學を方便として交際する如きは、別事に屬すべし。若し、和歌を知らざる友に向ひて、三十一字の話を試み、雅言を解せざる人に對して、俗語を用ひざるごときものあらば、反りて、人を耻かしむるに至るべし。最も戒むべきことにこそ。これを以て、おのれは、文學にて心を養へと言ふのみ。文學を口に談ぜよといふことは言はざるなり。

兄弟姉妹の關係と家庭の平和

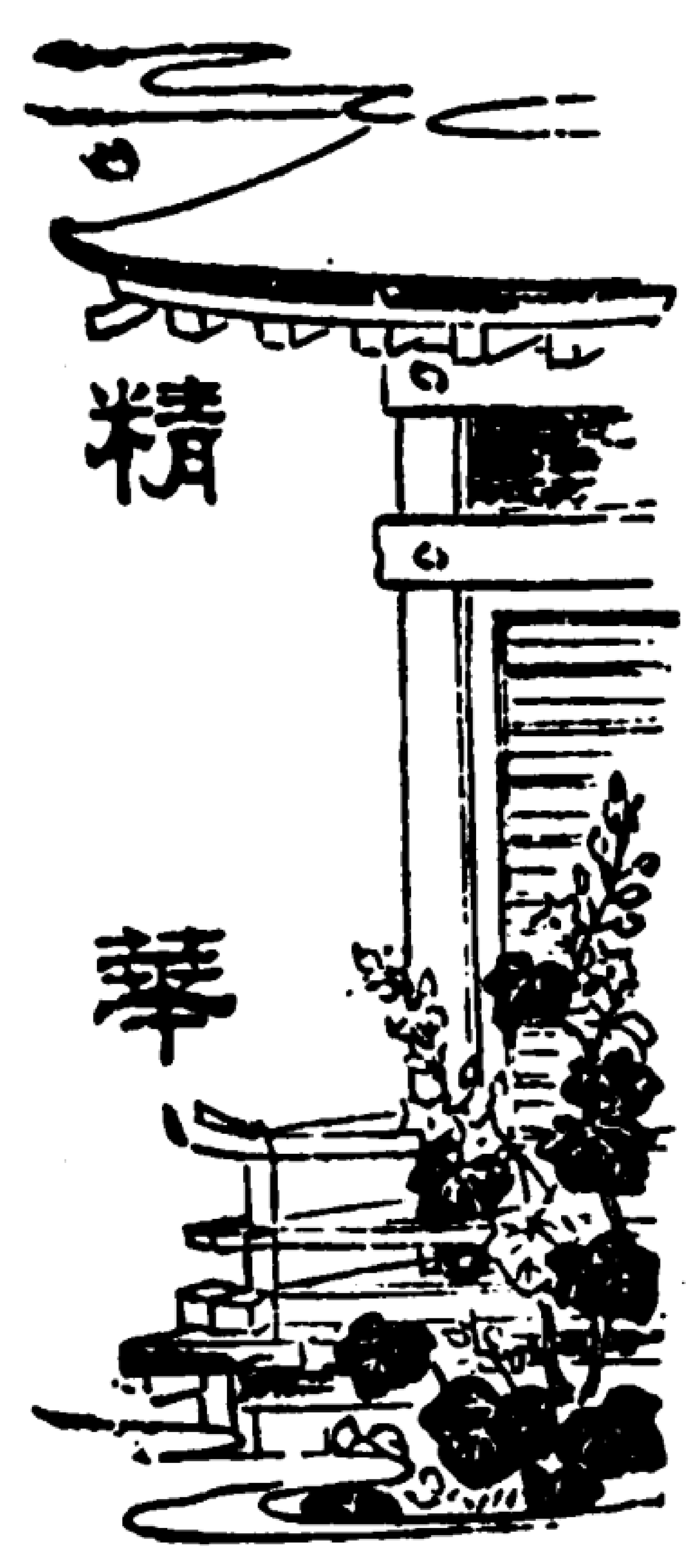
高井毅夫

父母は、我が身の出で來たる本にして、我が身は、父母の枝なり。而して、兄弟姉妹は、もと、是、同一父母の分身にして、あたかも、一本より出でたる兩枝の如きなり。其の體軀分離したれども、骨肉氣血は同一にして、相聯繫せること、互に、其の組織を異にせるが如し。これ、其の、天然の親緣關係を表せるなり。此の如き間柄なることを知らば、恩愛の意、一身の如くし、互に、相救ひ、相助くるは、左右の手の如くにして、愛慕恭敬、

一に、至誠の念より發動せざるべからず。世には、瑣細の事よりして、相互に、反目疾視し、忿怨爭鬪して、其の道を盡さゞるものあり。これ、一に、彝親の關係を忘却して、其の本心を失ひたるによるなり。此の如きものは、たゞに、其の身の徳を缺きて、終生を誤るのみならず、父母を憂へしめ、祖先を辱むるに至るべし。これ、左右の手をして、互に、相搏擊せしむるは、喪心者の行爲にあらずや。枝々、相牴觸排擠して、本幹の安固を望むべからざるは、また、理の睹やすきところならずや。兄弟の、互に、相爭ふは、みづから、其の身を毀るなり。父母の心身を傷ふなり。人、もし、之を知らば、須らく、其の放心を求めて、彝親を全くし、父母を安んずることを務めざるべからず。

兄弟姉妹は、一氣同體なれば、恩愛の情は、異ることなかるべけれども、長幼の間には、亦、おのづから、道あらざるべからず。長幼の道は、序を主とす。序とは、次第順序をいふなり。兄姉は、よく、其の弟妹を愛して、之を導き、弟妹は、よく、其の兄姉を敬して、之に從ひ、兄愛弟順の道、明かにして、長幼の次序正しきこと、あたかも、小枝の、大枝につき從へるが如くなるべきなり。これ、また、天然に出づるなり。もし、それ、兄姉は、弟妹を愛せず、弟妹は、兄姉を敬はず、長は、幼を虐げ、幼は、長を凌ぎて、其の次序紊亂せむには、到底一家の平和を保つこと能はざるべし。思はざるべからず。





精華

剛毅

剛毅の心は、大切なるものにして、人々、常に、之を養ふことを怠るべからず。

人、もし、この剛毅の心無からむには、事に臨み、權勢を懼れて、義を守り、道理を貫くことを得ず、或は、利害のために移されて、其の節操を保ち、志を遂ぐること能はざるべし。剛毅は、實に、人間の骨にして、此の心なき人は、あだかも、身體に、骨なきが如し。人に諛ひ、人に阿り、卑屈にして、耻づべき事をも耻とせず、淺ましき擧動多きものなり。

剛毅とは、權勢に屈せず、利害に移されず、其の身を顧みずして、一向に、我が誠心を貫徹せむとする、不屈不撓の精神をいふなり。人、一度心に決して、之を以て、正とし、義とすることあらば、始終、その志操を變ずることあるべからず。利に走り、慾に陷り、人に阿り、人に諛ふが如きは、丈夫の爲すべき事にあらざるなり。故に、一旦、心志を定めば、容易に之を動かすことなく、假令、如何なる事變に遭遇することありとも、この心を抱持せる所のものは、死を以て、之を守り、決して動かすべからざるなり。

剛毅は、此の如く大切なれども、その本づく所を、明に知得せざる時は、此の心は、養ひ得られざるなり。抑剛毅は、心思の公明正大によりて養ひ得らるゝものにして、我が心に思ふこと、身に行ふこと、一點の罪惡なく、明暗とも、其の行、

一徹に出で、操り廣げたる書物の、何人に披き見らるとも、耻づべき所なきが如くして、はじめて、剛毅の氣象、常に、心に充滿するものなり。然れども、もし、志行正しからざるところありて、一點にても、他人に、指さゝるゝ處あるやうにては、如何に、この氣を保たむとすとも能はざるべきなり。故に、剛毅の大切なるを知りて、これを養はむとするには、心を正しくし、身を謹み、義を守りて、利慾に惑はざらむことを肝要とするなり。

以上、說くところを約言すれば、剛毅は、權勢を恐れず、利害に惑はずして、誠心を貫くことにて、その本は、心の公明正大なるに在り。されば、剛毅は、とりもなほさず、正直なり。故に、幼少より、心を正直に持つべきやうに勉むべし。心正直なれば、こゝに、始めて、剛毅なるを得べきなり。人、いかに、才智秀で、思慮深かりとも、其の心、公明正大ならずして、剛毅の氣象なからむには、人たる甲斐はなかるべきなり。

烈女以幾子

緒方廣國

以幾子は、肥後國熊本の人鳥居何がしの女なり。かたち、いとうるはしくして、なよらかにえんなり。十六のとし、阿部景器のつまとなれり。景器母ひとりあり。これにつかへてまめ〳〵しく、いもせのまじらひ、いとあつくむつましかりけり。あるひ、かげきの、ことに服までひとよろひ、それの市に、ひさしくありふるまゝ、いとほしくおもひて、たびたび行き見たれど、あたひこゝろにまかせず、いと口惜しうこそと、ひそかに語れば、然

るものを、如何で、とみには知らせ給はざる。われ、たやすくとゝのへまゐらすべし。かならず、み心にな懸け給ひそ、といひて、自の衣裳あるひはかみさし様のものを、こと〴〵くこがねにかへつつ、餘人のもとめぬさきに、とく是をもて買ひとり給へとすゝめて、こゝろをなぐさめたり。

また、明治四年の夏、景器國事のことによりて、いたく疑を蒙り、ひとやにつながれしことありしに、吾が夫の、かばかりたしなめられ給ふに、いかでか、いをやすくせむとて、蚊帳の中には母のみねさしめ、おのれは、とばりの外のすのこのうへに、たゞ狩まろねして居たりとぞ。さて、かゝる中らひなれば、討入の夜も、よろづのこと、すべてもてかくさず、何事もあらはに、物とゝのへなどするに、かたはらはなれず、いそしみたすけたり。また、いみじうひそみ物することなれば、

外の方に「人のけはひなどすれば、いと心驚かるゝを、いち早くたちいで、あたりひそかに見めぐりなど、何事にも心用ゐすること、いたらぬくまもなかりき。さて、軍破れしかば、景器家にたちかへり、腹をはふり身まかりしに、以幾子も、その刄につらぬかれて、おなじかたはらに死にたり。頃は、同じ九年の九月十まり一日、年は、二十まり五なり。夜討の日は、終日さうじみして、敵どもたはやすくほろび、わが夫のつゝがなからむことを、深く神にうけひごとをまをし、景器のたちかへるまで、三日ばかりを、ものをたち、湯水さへたふべざりしとぞ。また、さとの母の、江戸にあるに送るとて、文どもしたゝむるに、露ばかりも、こゝろたゞよはしからず、何事も、もてしづめたるふるまひ、たけきもの丶ふにも、をさ〳〵、おとるまじうおぼえて、いとも〳〵、あは

れに悲しく、筆とるにも、いたくとゞめあへずなむ。
今はのきはによめ歌、

わがつまのなきたま待てよ二世かけて
ともにわたらむ三ッのかはなみ

待てしばしわれも大和のをみなへし
なにしてくにのあわをはむべき

世の中はいともはかなしものゝふの
ゆみ矢とる身のならひと思へば

景器は、おのれいと親しき友なりければ、日々にゆきかひし、其の夜も景器がりゆきて、物など調じつゝ、ともぐ＼にたちいでければ、以幾子のかねてのことは更なり、其の夜のふるまひども、皆まのあたり見きゝたることなり。のちのことは、ひとやにありて、人づてに聞きたるまゝなり。

此は伊豫の國大洲の人得能通虎ぬしにものがたりしを、いとあはれにきゝたまひて、やがて、みづから繪にうつし、ひとことかいつけよと、せちにこはるゝまゝ、もたしがたくてなむ。

おほかたの色ならめやは咲き散りも
世にめづらしきとこなつの花

大御代の十まりひとゝせのう月、松山の　役場にてしるしぬ。肥の道のしりをかた廣國。

右は愛媛縣喜多郡喜多村大字中村なる西山寅次郎同ぬいさいふ人々より、わが女鑑讀者諸嬢に知らせまほしき人のおこなひなれはさて、ことさらに寄贈ぜられしものなり。而して其の好意を謝す。また口繪は、即ち、得能通虎ぬしのゑがゝれしを模寫せしめたるものなり。

孝女かう

田山とり子

親の温きなさけのかげにかくろひて、憂世の中の

憂節をも知らぬ、少き人々は、何か、强ひても敎へ訓さるゝことなどあれば、妾は、未た年いと弱きを、成人とや思召すらむ。あな、うたてなど喞くさへ尠からずとか。よし、然る素直ならぬ心もたらぬ人なりとて、先づ、この孝女の傳を讀みねかし。

かう女は大坂南問屋町のものなり、普通の娘ならば、乳ばかり呑まむとする六七歲のころ、不幸にして、養母の澤といふが、病にかゝりて、年月を病蓐の上にておくる身となりぬ。かう女は、いたいけにも我が身に相應しき職業をもとめ、いそしみ努めて母を養ひ、暇を見ては、腰脚を按摩り、さては、藥の事など、介抱看護も亦なほざりならざりき。

斯くても、人の生命は定れる數のあるにや。天明八年に、養母は遂に死去りぬ。さて後は、幼心にも、よく養母の遺訓をまもり、稚遊びにも立ちまじはらねど、物見遊山は猶更のことなり。唯々職業を勵みて、常に夜闌くるまでもつとめいとなめり。朝夕香物一種を和物にして、何事によらず總べて、身をつゝまやかにし、家賃の滯納、買物の懸といふこと絕えてせず、聊も、他人の情にあづかることなくして過せり。養母の一周忌には、みづから思ひたち、同じ長屋の人々を招き、心のかぎりのもてなして、亡き人のために追福供養したり。

時に寛政二年なりき。町奉行小田切土佐守、松平石見守この行を聞きて、いたくあはれがり、日頃のふるまひ、ありしことゞも、具に幕府に聞えけれど、褒美として銀子若干を賜はりきとぞ。

讀者諸孃、かう女は其の折に幾歲ばかりぞとおばす。幼きものとは前に言ひたりき。然れど、其の

歳を言ひあてむことは甚かたかるべし。實に、かう女は僅十五歳の時なりけり。



女禮稽古の仕方

有住常子

同、結酌取様　先づ、婚禮の祝盃には、三々九度結酌にすべし。先づ、本酌、加、並び出で御次下座につき、式正には、先づ本酌加床の前に進み、神酒を銚子にうつし、壹たん下座へ持下る作法あり。委敷は、次の婚禮式の條にしるす。様子見斗ひ、やがて、本酌聟の前に進み、御酒を二献つぎて、下座の方に向ひ、加にたち下座に下り、聟の方へ座す。其の時加の者右に立進み出で、嫁の方に參り座し、向ひ合せ御酒を加へ、をはりて、本酌たち出で、向ふの方に進み出で、加の者の側を通る程に、行きめぐり、聟の前に二度進むべし。其の時、加の者たちて、本酌のあとをあゆみ、まるく廻りて元の所へ扣へ居る。本酌、其の節聟へ一献つぎ、嫁の前に參り、聟同様御酒をつぎて、たつ時は、上座の方に向ひて立つべし。聟嫁の座くばりにより、初め右に向ひ立ちたらば、をはるまで右にむきて立つべし。すべて、本酌、加とも、いつもあとへもどらぬ様に立廻るなり。盃納り、末座大結と云ふは、本酌加勝手に入る時、本酌は、座敷のまん中を通る、其の時、加の者むかひ出で、本酌に行向ひ、嫁の座の方にそひて廻り、本酌のあとに附き、一同に御次へ入る事なり。聟入舅入等の祝ひ盃も、式正は、結

酌にする事なり。

臨時の客の應援（九）

三石直子

給仕、若し風邪などにて、度々噴鼻出かゝらば、自分の後方へ向き、鼻へ袖を當つべし。鼻かまば、次の間に立ち、片角へ向ひて大きく音のせぬ樣に、三度ほどにかむべし。

雨降り出すか、若しは、途中にても降り出さむ樣子ならば、主人より、密に給仕へ申付け、客人の下駄傘、供の者の雨具等心づけ、用意なくば、それ〳〵渡しおかしむ可し。下駄の鼻緒など、よく〳〵注意し、きれさうならばすげ替へて用立つ可し。傘も破れざるものを擇び渡すべし。主人の氣象も、大方、斯る些細の物事より推測せらるゝものなれば、おろそかに爲べからざる事なり。

さて、右樣のものを供の者に渡しおはらば、手を洗ひ、座敷へ戻り、渡しゝ由を密に主人に申し上ぐべし。

但し、客人へ貸すべき雨具の有合なくば、親近しき家より借りてなり用立つべし、其もかなはずば、右の由主人より斷りて、雨止みて後に立する樣にすべきなり。用意なきをかくさむために、わざと心づかぬさまして、雨中に、客人を濡れながら歸らしむるは、中々に、恥づべき心術にして、いと陋なり。

客人、暇乞して立たむとする、主人よりは、今暫時はなど引留むれども、強ひて立たむとする樣子ならば、給仕は、先づ、供の者へ、御立の樣子を告知らせ、玄關其の他、客人の出入す

るところに、供の廻りたるを見届け、座敷若しくは次の間へ戻り、見えがくれの所に扣へ居るべし。

いよ〳〵御立になり、主客の禮もをはらば、給仕は、小早く供の者へさらに、又、御立の由を知らせながら、玄關下座敷へ下りて、手を突きて扣へ居るべし。

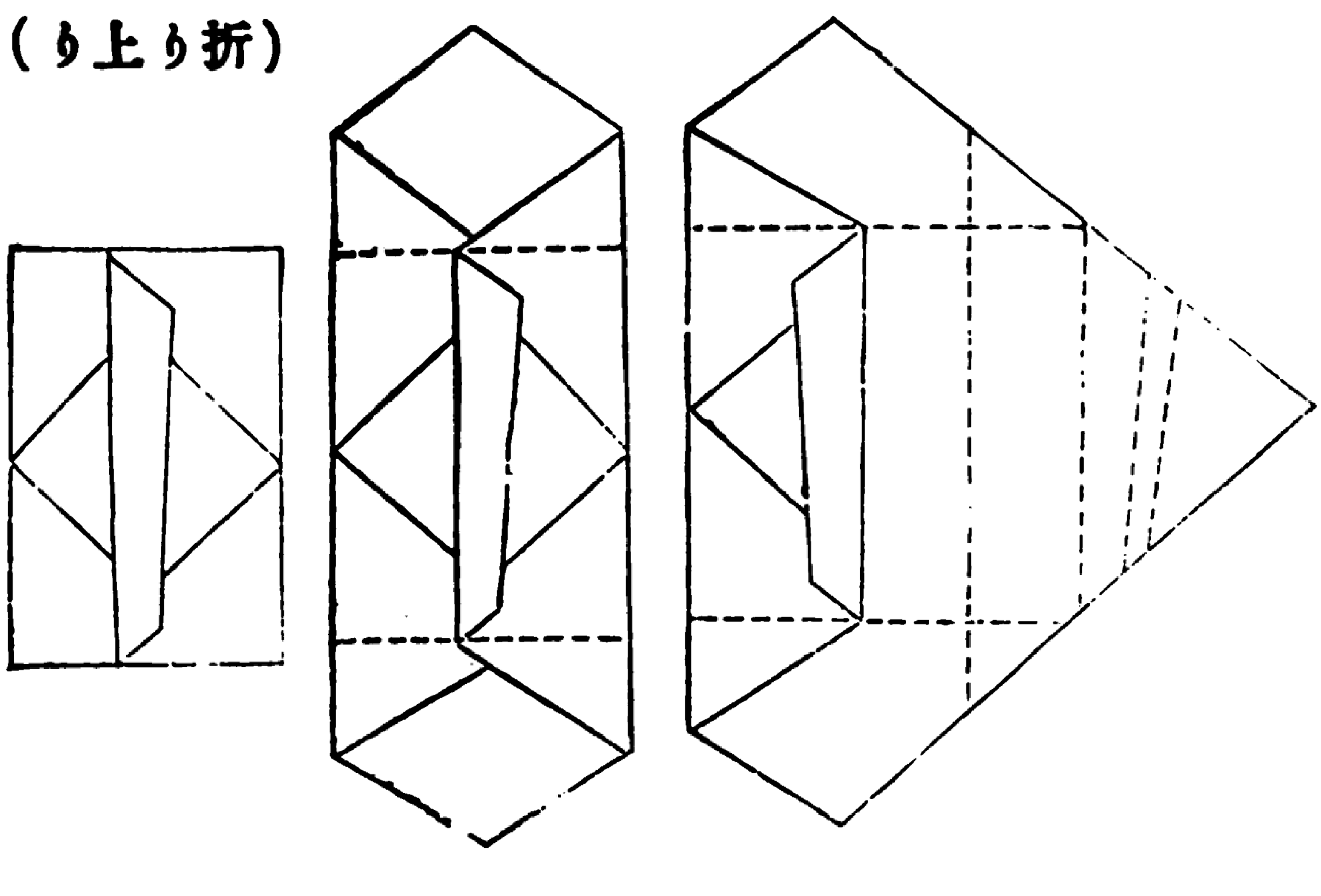
折方

眞立包

有住くわう子

眞立とは、眉を立つる道具なり。つゝみ方、左の如し。

水引かくるなり。

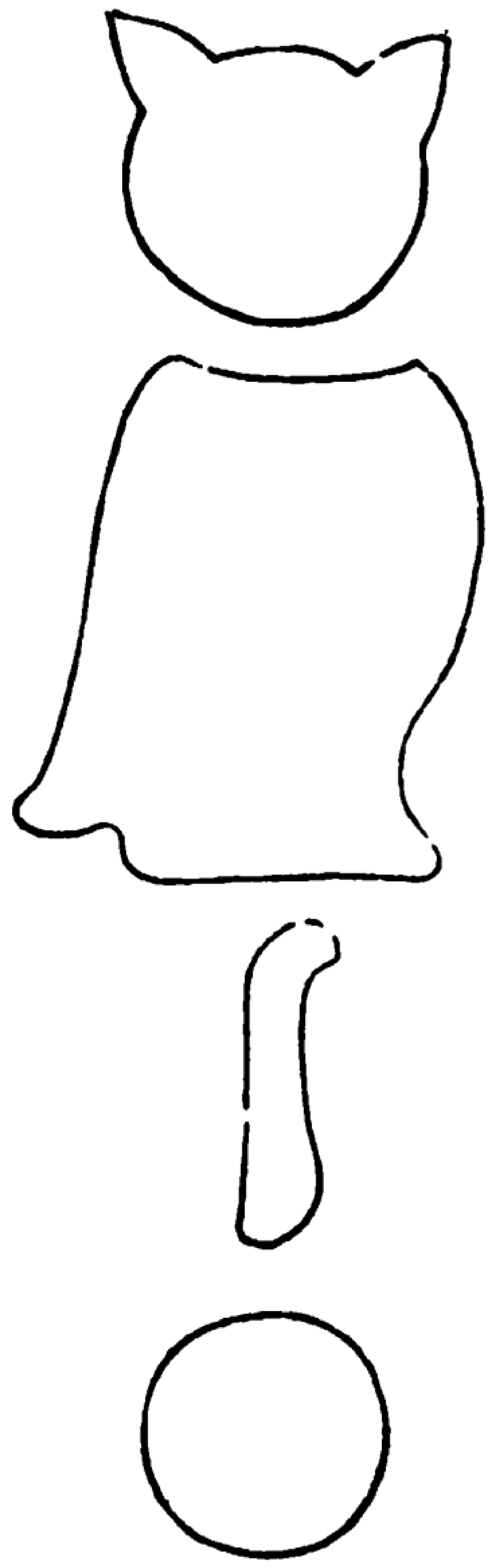


(折り上り)

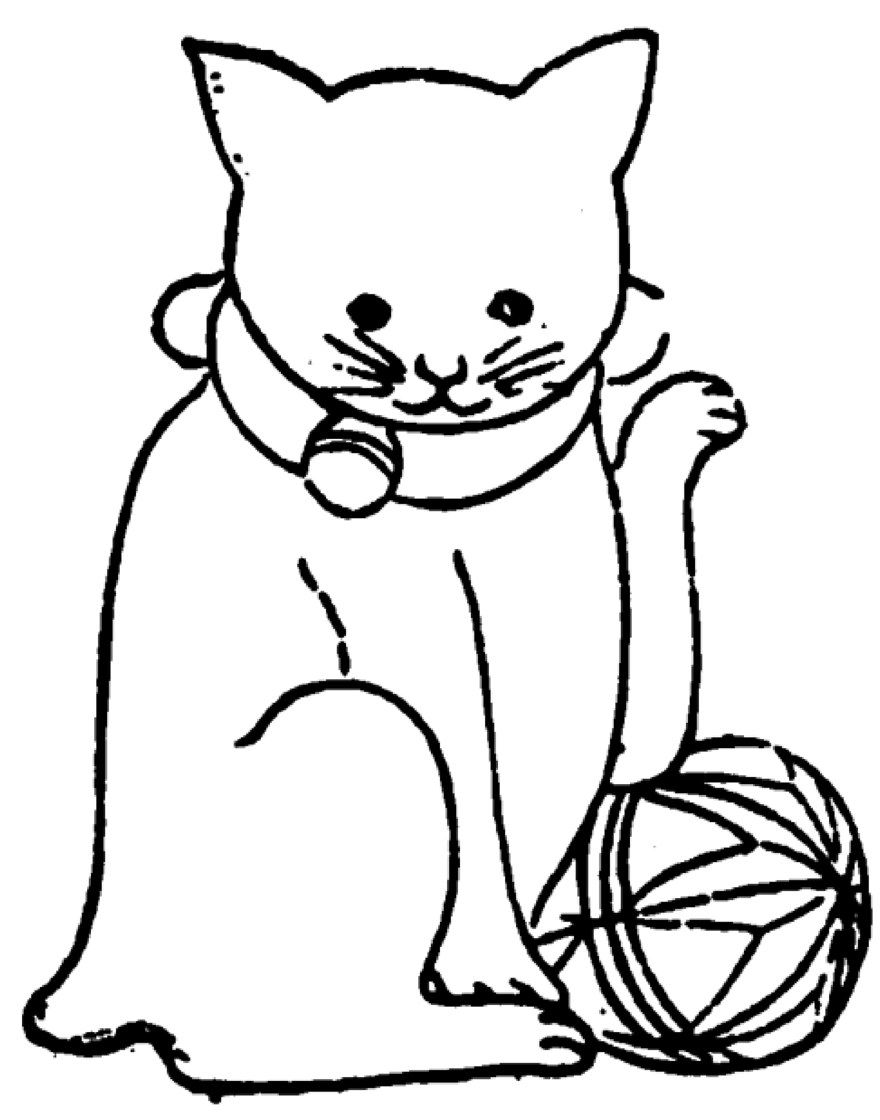
たちぬひ

西山たい子

猫に蹴鞠



まづ、右の形に厚紙を切り、胴には、綿をあつく、手はそのつぎ、鞠も、眞中を隨分あつく丸く、顏はすつぺりと入れて、切をはりつけて、組み合せ、目、鼻、口、耳、手足等を書くべし。又、頸輪、鈴等を下ぐるも愛らし。切は、白がよろし。此の形は、昔よりありきたりたるものなれど、手もてまず、一寸、愛らしく形よきものなり。左圖を見て推すべし。



だいどころ

鯏の杉田煮

大あさりを鹽剝になし、貝より出る汁を、別の器にとり置き、鷄卵をわり、能くかきませ、これと剝身とを小鍋にて熔り、卵の如くざつといりて、

此の中へ前にとり置きたる貝の汁を投れ、食鹽少しを加へ、ざつと煮て、器に盛つて出すべし、淡白にて美味なり。

梅田巻

鰻のめそこをさき、牛房を杉箸よりも、少しふとき位に、三寸ばかりにきり、能くゆでゝ、三四本づゝ束ね、前の鰻を、巻串にさし附焼となし、粉山椒、又は、胡椒をかけて用ゐる。

蛤の南蠻煮

大蛤の剝身を、醬油ばかりにて、七色唐がらしを加へ、ヒタ〱に煮あげ、これに、鰹節をけづり粉にしたるものと、麻の實の炒りたるとをふりかけて出す。

半片の雲丹田樂

半片を幅五分丈一寸程にきり、湯煮して青竹の小串に刺し、雲丹を、酒又は醬油にてとき、塗りて用ゐる。

とろゝ汁

これに用ゐる薯は、やまと芋、又は、自然薯をよしとす。先づ、鰹節の煮汁をとり、醬油にて少しからめに鹽梅し、さまし置き、芋を洗ひ皮をむき、わさびおろしにておろし、摺鉢にて能くすりたる後、前のさまし置きたる汁を少しづゝ投れて、だん〲にのばし、味を見て、能程になりたる時、椀に盛り、青海苔、ねぎ、唐がらし杯添へて出すべし。

菜花園

○稲　己等が日々の食物の主なる米の事は、凡そ、

人として知らざる人なからん。然れども、田畝に遠き市街の地に生長し、または山ふかく、或は海岸の地に人となりし方々には確に、知らざるもおはすらむ。今はむかし、江戸の某屋の女、おさんに問うていはく、米は如何なる木にか熟るらんと。事いつはりに近しと云へども、さにあらず。甍をならべ軒をつらねたる方數里の大都の中、しかも深窓に育ちし人には、さもありけむ。そも、籾を苗代に蒔きてより、米にして人々の口にせらるる樣にするまで、農夫等のいかに勞苦せしか。いかに心つくしなりしかを、逐一、述べんとす。

稻は、古語に奥津御年と云ふ。奥は萬の種物の中にて、最後に熟するもの故、おくの意なり。御年は、植ゑてより獲るゝまで、滿一年に亘る故に、としと云ふとぞ。(又稻によりて一年のことをとしと云ふともいへり。)年中間斷なく手入するなり。

太古に　皇祖天照大神、蒼生のために、豐受姫之神の御身に化りませるを取り、嘗め試みさせ給ひて、こは、蒼生のくひて生くべきものなりと仰せらて、いたく嬉ばれ、天孫降臨のをりも、さいくさの三の御寶につぎては、此の稻種をぞたまはらせ給ひけり。故に、國の名も美豆穗之國と云ひて、いな穗のみづ〳〵しきより　名づけられたり。それ農は天下の大本にして、農の大切なるものは、米にぞありける。

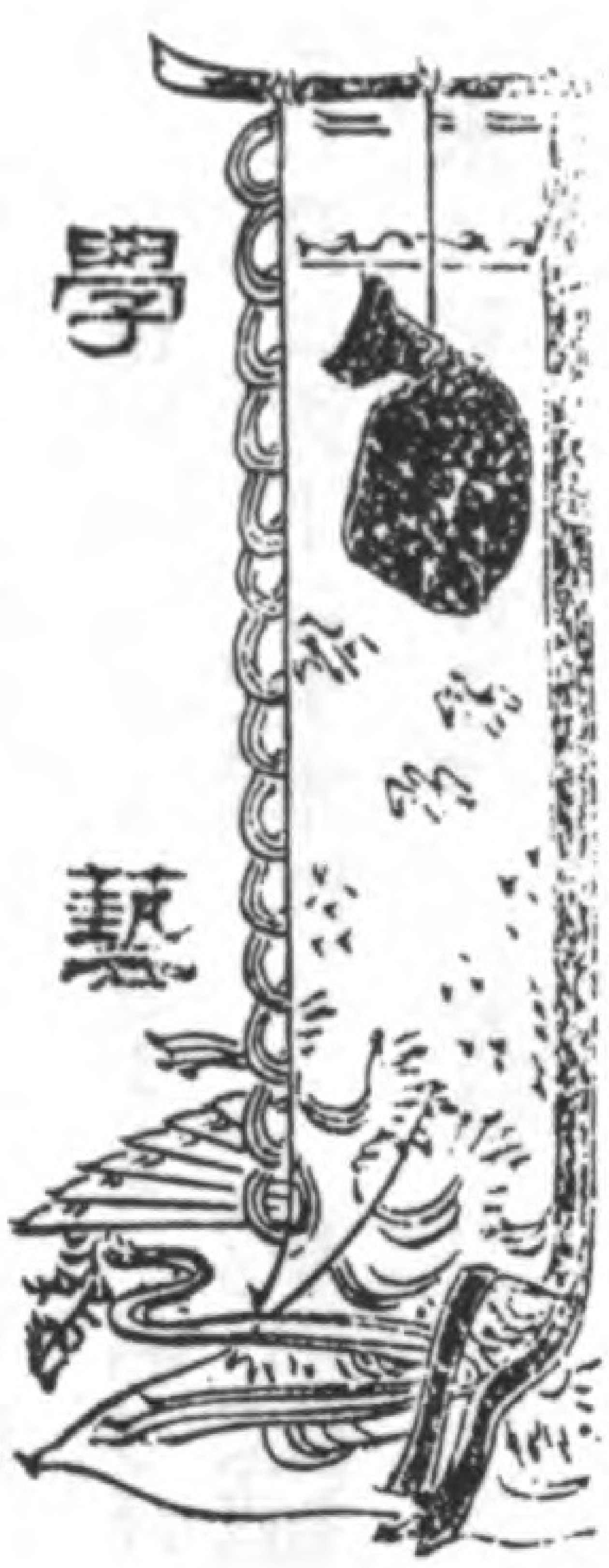
朝よひに飯くふごとに豐受の
　神のめぐみをおもへ世の人

天つ日の照さんかぎりは、此の五穀の祖神は、是非々々飯を口にするごとに、思ひ奉るべきことならずや。かならず食物を麁末にすべきにあらず。況んや、また、粒々みな辛苦よりなれるをや。

先づ、辛苦の初は、種籾をもやす事にて、國々に

よりて異なれども、最も多く行はるゝ方法は、まづ精撰したる籾を俵に入れ、池水に漬すこと一週間ばかり、其の後、藁にて厚くつゝみ、多く、草わらなどを積める中に納め置くなり。しかる時は、籾は皆白根を出す事二分ばかり。此の時、始めて苗代に蒔くなり。苗代の仕立かたは、いたく困難なり。東北地方などにありては、まだ、とけやらぬ氷を踏破りて泥に入る事三尺ばかり。さて、其の苗代を細かに耕し、さて、馬の後に、まんぐわんといふものをつけ、一人之を押し、年の頃十三四のさをとめ轡に六尺ばかりの竹をつけて、春のあら駒を導くなり。かく一枚の苗代をこなすこと數回に及べは、馬、自ら勞れ、鼻の赤き所までむきいだし、氣息ばみて進まず。馬後の男、荒布のやれ衣みな泥にまみれ、眼のみ光る様なるが、太き鞭をとりて、馬の尻方をうつ。さすがに、馬はをどり上り、つけたるまんぐわんを振り飛し、かけありき、泥は空を掩ひて咫尺辨せざるにいたる。たをやめはいかて、忍はんや。忽ち、たふれて泥の底に埋めらる。かかる事とも數回、田面は、砥のごとく平かになり、程よく青芽を生せしむるにいたる。

（この項未完）



國文學講義

（二）

磯野德文

凡、都鄙を論せず、同じ鄉村に住居する人は、先祖以來、常に行きかよひ、互に、久しく馴習みぬ

れば、其の筋目、もとも忘るべからず。たとへば、他國にありて、我が故鄉の人にあはゞ、いとなつかしく、親族のおもひをなすべし。是にて同じ鄉村の人は、常に、疎略にすべからざる事をしるべし。いかなれば、今の世の人、一旦のいかり、又は、わづかの欲によりて、日ごろのよしみをわするゝにや、もとも嘆かはしき事なり。

○この文は、室鳩巣が、かゝれたる六諭衍義大意といへる書の一節なり。鳩巣、名を直清といひき。はじめ加州侯に仕へたりしに、將軍德川家宣に召されて、殿中侍講となり、享保十九年八月十二日、よはひ、七十七にてみまかれり。

○凡、都鄙を論ぜず、同じ鄉村に住居する人は、先祖以來、常に行きかよひ、互に久しく馴習みぬれば、其の筋目、もとも、忘るべからず。凡、は、オホヨソとよむ。おしなべて、といふこゝろなり。都鄙を論ぜずは、トヒをロンせずとよむ。都は、ミヤコとも訓みて、宮處のこゝろ、即、大君の大宮をしき給ふところをいふ。鄙は、ヒナとも訓む。田舍のこゝろにて、邊僻をいふなり。論ぜずは、イハずといふこゝろにて、都と鄙とのわかちなくといはんが如し。同じ鄉村に住居する人はは、オナジガウソンにヂユウキヨするヒトはとよむ。同じは、別ならずして、一なるをいひ、鄉村とは、すむさとをいふ。住居する人は、すめるひとなり。先祖以來は、センゾイライとよむ。先祖は、とほきはじめのおやなり。以來は、コノカタともよみて、其の時より今までといふこゝろなり。常には、ツネにとよむ。平生といふにひとし。行きは、ユきにて、かよひは、通ひなり。徃來するをいふ。互には、

タガヒに、とよむ。違にのこゝろにて、此方よりも、彼方よりもするをいへり。久しくは、ヒサしくにて、年月のおほくへたるをいふ。馴習みぬれば、は、ナジみぬれどとよむ。ナジムは、馴れ染むこゝろなり。其の筋目は、ソのスヂメとよむ。筋目は、すぢの分れめにて、條理の意なり。もともは、最にて、眞と眞のなまれるなるべしといへり。忘るべからずは、ワスルベクアらずにて、忘るまじきことよとなり。以上をいひかふれば、おしなべて、都にても、鄙にても、同じさとにすめる人は、先祖の代より、今に至るまで、此方よりも、彼方よりも、其の家に、往來して、久しき間、馴じみたれば、其のわけをば、とりわけて、忘るまじきことなりとなり。

〇たとへば、他國にありて、我が故郷の人にあはゞ、いとなつかしく、親族のおもひをなすべし。是にて、同じ鄉村の人は、常に、疎略にすべからざる事をしるべし。

たとへては、ほかのことに擬へていへばといふこゝろなり。他國は、タコクとよみて、ヒトノクニ、即、よそぐにをいふ。我が故郷は、ワガコキヤウ、又は、ワガフルサトとよむ。おのがふるくすめるさとのこゝろにて、我が本地をいふ。なつかしくは、懷しくにて、馴れ付かしきこゝろ、親族は、シンゾク、又は、ウカラとよみて、今、世にいふ親類なり。ウカラのウは、内のこゝろ、カラは、トモガラ、ハラカラ、ヤカラなどのカラとおなじくて、族の意なり。是は、コレとよみて、上にいへる、たとへば云々をさしたり。疎略は、ソリヤクとよむ。うとうとしきなり。事は、コトなり。以上をいひかふ

れば、これを、ほかの事に擬へていへば、おのが國ならぬ旅にて、わがすめるさとの人に、めぐりあはゞ、懷しくて、親類の心地すべし。この事にても、同じさとの人をば、平生、うと〳〵しくすまじきことを知るべしとなり。

○いかなれば、今の世の人、一旦のいかり又は、わづかの欲によりて、日ごろのよしみをわするるにや、もとも、嘆かはしき事なり。いかなればは、如何にあればにて、何故なればなり。今の世は、イマのヨにて、現今なり。一時のいかりは、一時の怒なり。一旦は、イッタンとよむ。又はマタとよむ。一つなるが分るゝこゝろ、もと、眞手にて、手の指の分れたるよりとれる義か。いかゞあらん。わづかは、いさゝかなり。欲は、ヨクとよむ。しきりに、物をほしとおもふ情なり。日ごろは、ヒ來にて、平生といはん

が如し。よしみは、此方よりも、彼方よりも、好しとおもひあひて、睦ましきをいふ。にやのやは疑ふことばなり。下に、あらんといふことを補ひてきくべし。上の、いかなればより、ナゼ云々、忘ルヽノデアラウカと聞かば、よく聞ゆべし。およそ、上に、如何、幾などの疑のことばあれば、下には、かにてうくるが格なるに、こゝに、にやと用ゐたるは如何あらん。嘆かはしき事は、ナゲかはしきコトとよむ。嘆くは、長太息することにて、心、感動して、太息をつくよりいへり。

漢文學講義

佐々木天游

月瀬記勝六

齋藤拙堂

舟中既覽二尾山諸谷一。又欲三西觀二桃野一。幾

轉棹。則北岸所未見之山突兀躍出。樹石雜焉。蚪龍虎豹。譎詭天矯。有一石。如人之冠而立。曰烏帽子巖。水益駛。激搏碨礧。稍緩處。俯而窺之。澄徹見底。游魚可數。花片點波。輒就唼之。無所得而逝。爲之一笑。』仰見桃野在前。地勢陡絶。黃茅數家。縹渺現出於梅花爛漫間。如瑤宮瑶闕在白雲中。可望而不可即也。』篙夫云。此溪每夏月躑躅花開。水變作猩血色。亦爲奇絶。故名爲躑躅川也。』嗚呼此溪之奇一何多也。恨一時不能併觀焉。』記之以俟他日。』

舟中、既に尾山の諸谷をみる。又、西、桃野をみむと欲す。纔に棹を轉ずれば、則ち、北岸未だみざる所の山、突兀として躍出し、樹石雜る。蚪龍、虎豹、譎詭天矯たり。一石あり。人の冠して立てるが如し。烏帽子巖と曰ふ。水益々駛せて碨礧に激搏す。稍々緩なる處、俯して之を窺へむ、澄徹にして底をみる。游魚數ふべし。花片波に點ずれむ、輒ち、就いて之を唼ふ。得るところなくして逝く。之が爲に一笑す。仰いで桃野の前に在をみる。地勢陡絶して、黃茅數家、縹渺として梅花爛漫の間に現出し、瑤宮瑶闕の白雲中に在りて、望むべくして即くべからざるが如し。篙夫云ふ。此の溪夏月などに、躑躅花開き、水變じて猩血色を作す。亦奇絶となす。故に名けて躑躅川となすと。嗚呼、此の溪の奇一に何ぞ多きや。恨むらくは、一時に併せみる能はざるを。之を記して以つて他月を俟つ。

舟の中で、既にはや、尾山のいくつもの谷を見物してしまひました。(尾山は月が瀬中の地名にて、此所に初谷、敞谷、大谷、天狗嵓などいふ有名の

八つの谷があります。諸谷とは、即ち之を指して云ふ)そこで、又其上に、方角を變へまして、西の方桃野(矢張月ヶ瀬中の地名)といふ所の、最色を賞觀せんと思立ちました。就いて纔に少許り水棹を轉じて、舟の艫前を廻轉し、桃野の方に、向直しますれば、則ち、(則は上文に順うて分折するの辭で、向直した所が其の時にと云はんが如し)北の方の溪岸の、此迄未だみませぬ所の山が、突兀(突兀は突立ちた有様を云ふ。形容詞なり。)と突立ちて、眼前に躍り出で、規れまして、樹本岩石などが、突兀たる山に雜りて。一段の奇觀を添へました。(瑪は平落の辭と申しまして、文勢を平らかに落す時に用ゐる字なれども、此所は、たゞ此に雜ると云ふほどの意なり。さうして、其の奇絶なる有様を申しますれば、虯の如く、(虯は青色にして。角ある龍を云ふ。)龍の如く、龍は古人の説

によりますれば、鱗蟲の長にして其の類が種々あります。即ち、鱗あるを蛟龍と云ひ、翼あるを應龍と云ひ、角あるを虯龍と云ひ、角なきを螭龍と云ひ、未だ、天に昇らざるものを蟠龍と云ふ様なものであります。)虎の如く、豹の如く、譎詭(譎詭は怪異と云ふことに同じ。司馬相如傳に、奇物譎詭俶儻窮レ變とあり。あやしと云ふほどの意なり。又詭譎は變化を云ふことにて、文選にも、瑰異詭譎などあり)天嬌と、景色が變化奇異なる有様である。(天嬌は、松の木などの、うね〱と屈りた有様など、又龍などの蜿々と、高く擧る有様などを形容する時などに多くある文字なれども茲所にては、さして意味あるに非ず。唯、變化奇異なる様子を、形容せし迄なり。)か溪川の中に一の石がありまして、其の形は宛も人の冠を着けて、立ちて居る様であります。そこで、其の名を烏帽

子巖と申します。此の邊になりますと、溪川の水勢が益々駛せて、流れが愈々急になりてをります。さうして、石のがつ〳〵に、ではいり（碨磊は石の平かならざる樣を云ふ）して居る所に、觸れ激して搏ち當り、矢を射る如く飛沫を散じて流れてをりますが、水勢の少し緩くて、あまり激搏せず、寛慢に流れてをります所は、舟中より首を水面に垂れ俯してのぞきますれど、溪川の流が淸きものでありますから、澄み徹りて、水底迄かよくみえまして、水中を游泳ぐ魚が、一疋二疋と數へることが出來る程である。梅の花の花片が、ちら〳〵として溪川の波の上に落ち點じますれば、ぢきに（輙は助字で、たやすくなど云ふに同じ）魚が浮み出で、唹喁りと波上の花片を喰ひますけれども、魚の口に呑込んで。餌とすることができぬで、花片は波の上に流れゆきて、一も魚が得ることとなく

して、唯、空しく喰ひそこなふさまが、可笑きものだから、其の爲に一笑いたしました。（茲所迄は、桃野に行くまでの、途次の溪川、景色、並に溪岸の山や樹石の有樣を、記出したもので、游魚花片の模樣など、殊に面白し。其の可笑しな樣が、目に見ゆる樣である。作者の輕々筆を用ゐる所返て味ふべし）

さて首を仰ぎて、桃野と申します所の、眼前にあるのを見上げましたが、此の桃野の地勢は、絲に峻險しく立ち、つききれて、崖壁峭絶になりてをります。（陡は阧又は斗に同じく、峻立の意なり）さうして（茅葺の三四軒の家（黃茅は茅葺のことなり）が、縹渺はかすかに、隱見するの有樣を云ふ）とかすかに、梅花の爛漫と、今を盛りに咲滿ちたる間に、茅屋根が隱見現出して、其の景色の妙なることは、仙人などの住ふ瑤宮（瑤は、玉の

美なるものなり）美玉の宮殿や、瑤闕（瑤は。赤玉なり）闕は樓門のことで、中央が闕て道と爲りてをりますから、闕と云ふ名が起りました。）赤玉の門觀が、白雲の中に在りて、遠方より望み見上ぐべくして、其の白雲中に往き即きて、瑤宮瑤闕に、住むべからざるが如く、地勢徒絶したる桃野の梅花滿開爛熳の間に、茅屋根、縹渺隱見する有樣は、實にえも言はぬ景色で、宛然望むべくして、即くべからざるの仙宮に彿彷たるのぢや。（也は平落の辭なり。茲所にては、ぢやと云ふ程の意なり）此の一段、桃野の風景を寫出して、巧麗老鍊師の筆をみるが如く、文勢亦縹渺なり。いとむさくるしき茅屋を寫し。忽ち變して、瑤宮瑤闕となす。文士の妙腕、深く味ふべし。

不レ可レ即也で、桃野の梅花のことは結びまして、茲所の篙夫以下は、言はゞ、文の餘波であります。

さて桃野の梅花の勝も、已に見終りましたが、篙夫の水棹を操る船頭が申しますには、此の溪の勝は、未だ之に留らぬで、年々夏の月になりますと、躑躅（躑躅は和名鈔に以波豆々之　一云毛知豆之もあり。つゝじのことなり。躑躅は、もと足を以て地を擊ち、たちもとふりて、不レ進の形なり。陶隱居が本草註云、羊躑躅、羊誤食レ之、躑躅而死、故以名レ之と。又、古今註には、羊躑躅花黄羊食レ之則死、羊見レ之則躑躅分散。故名ニ羊躑躅一など云ふ說あり。躑躅を以て、つゝじに名くる所以。蓋し此に本づく。）の花が、溪の兩岸に咲き滿ち、それが溪水に映りて、水色が變じて。猩々の血をみた樣に、眞赤になりますが、これも亦、（亦は傍及之詞と申して、彼もであるが、此もまたと云ふ如き。意味の文字なり。）めづらしき（奇絶は奇妙絶妙の意にて、不思議にめづらしきこと）こと

であります。其の故を以てゞ、躑躅の花が溪水に映りて、猩血色をなしますから、此の溪を一名躑躅川とも申しますのぢやと、個樣に棹を操る夫が申しました（此迄は、篙夫が作者に話るの言なり）が、「嗚嘑さても〳〵、（嗚嘑は嗚呼に同じ歎辭なり。玆所にては、さても〳〵と解すべし。）此の溪の絶景は、一に何として。此の通りに、數々あるであらうか。已に梅花の勝に富むのみならず、亦躑躅の勝に富む。さても〳〵、勝景の多きことである。（玆所の也は語巳之辭なり）たゞたゞ遺憾なことには、一時に梅も躑躅も、すべて、此の溪の勝を寄せ併せて見物することの、出來ぬと云ふことである、（玆所の焉は、矢張平落の辭にして、一時に合せて、之をみることが出來ぬ。之が殘念と云ふ程の意なり。）そこで、今暫らく之を記すで、此の事柄を筆にして、以ていつか復其の中に、躑躅の咲く頃に、重ねて來り遊び、溪水變じて猩血色をなすの奇景を賞し、梅溪の全勝を見盡すの日を俟つで、先づそれまでのかたみて、此文を書き記すと云ふ意味なり。さて、未だ梅溪の勝をみざるの人は、他日之をみる迄のかたみに。玆の文を誦し。既に梅花の勝をみるも、未だ躑躅の勝をみざるの人は、異時之をみる迄の僅見に、玆の文を誦せば、趣味も亦一入なるべく、而して未だ必ずしも、臥游の思あらずんばあらざるなり。





漫録

諸國孝義錄（大和國、上）

孝行者平三郎

平三郎は、宇陀郡拾生村の年寄百姓なり。父を仁右衛門といふ。若きより農事に力を盡し、聊の事にても親の心にたがはず。その妻も、又、夫に從ひ朝夕の孝養おこたる事なし。父仁右衛門も、生れつき正直にして律義なる者なれば、父子の間睦しく、神佛を信じ、所の者にもよき人と稱せられ老年に至るまで身健にして、平三郎夫婦の者の孝行をよろこべり。常に、賑やかなる事をこのみければ、年ごとの盆踊するとき、あたりの子どもを頼みて、我が庭に踊らせ、おのれ夫婦もうちまじりて、父の心を樂しましめき。常に、物のはしに父母のいひつけられし事、又は、病ありし時いつれの藥にて快かりしなど、書きおき、或は、親につかふるわざよろしき人ありときけば、殊更にたづね行きて、いかゞして親の心にかなひ給ひしなど、そのつかへしあり樣をとふ。仁右衛門外に出づるときは、夫婦共に立ちいでゝ、影みえぬまで見おくり、歸る比はひ、迎ひに出づることも、又、かくのごとし。平三郎、男女をもめしつかふ程の者なれど、夫婦共、みづから仁右衛門がおきふしをたすけ、食事すゝむるには、わけて心を盡しぬ。母は二十年あまりまへに、世を早うせしかば、父の老をたすけむがため、老いたるうばをめしおき、側にさふらはしめ、何事にもあれ、老いたる人の心にたがはずよく仕へよかし。其の心にだにかなふ物ならば、父なからん後には母ともお

もひなしなんなど、いひふくめしかど、うばもまめやかによくつかへしとぞ。平三郎、子をうしなひし時、父仁右衛門も、平三郎がなげきをおもひやり、いたくかなしひしければ、其心をやすめんとて、みづからのなげきを忍び、小うたなどうたひて、父に力をそへけり。平三郎、また、いと弱きころ、父母のかたちを木にて刻み、箱に入れおき一夜にても外にやどれる時は、その箱を首にかけゆき、みづから物くふときは、兼て、箱に入置ける膳具とり出で、すべての物をわかちそなへ、夏は、ちいさき蚊帳をもうけ團扇もてあふぎつ。おのれが耕す田畑ともに、ゆたかに年あるときは、一とせに二度、かの箱をゑりにかけて、その所々をめぐり、箱のふたを開き、其が年のなりはひの事など、とはずがたりにし、家にありては、うせにし母の像に、日々に食をたてまつり、食後にはちいさき煙草盆をすゑ、夜にもなれど、その日のあらまし、ゐますかごとく物語しけり。其の孝行はさらにもいはじ、年寄役にもあれば、村の事つかさどれる萬の事につきて、いさゝかも、道ならぬ事なく、親族にむつましく、めしつかふ男女にも情深く、家も、また、乏しきにいたらず、年ごろ火のいましめおこたらず、夜ごとに、みづから竈の灰に水そゝぎなどしけり。又、たばこ賣る事を業とすれば、朝ごとに、煙草一把を箱に入れて、神棚の前にさゝげて、いたゞきつゝ。かゝりければ、其の所の庄屋年寄などいへる者、寶暦四年、おほやけの地をあづかりて、貢とりをさむる伊勢の古市の役所に訴へて、其の行状をのべしかど、藤堂和泉守、聞えあげて、同じき八月、銀そこばく賜はりきと。

和歌の感興

室　鳩　巣

和歌に感興の益あり。

もゝしきの大宮人はいとまあれや
　櫻かざして今日もくらしつ

とよめるにぞ、我が朝も、延喜天暦のころは、朝廷和平、群臣閑暇なりしこと、おもひやられて、いと感ふかし。其の外、古今集の歌は、詞すなはに、餘情ありて、おほくは一唱三歎するに堪へたり。

もゝ千鳥さへづる春はものごとに
　あらたまれども我ぞふりゆく

此の歌を吟ずれば、老人の懷舊の情を感ずべし。

春の夜のやみはあやなし梅のはな
　いろこそ見えね香やはかくるゝ

此の歌を吟ずれば、有德の掩ふべからざる誠を感ずべし。

世の中にさらぬ別のなくもがな
　千代もといのる人の子のため

此の歌を吟ずれば、孝子の、親を愛する情を感ずべし。

風ふけばおきつ白浪たつたやま
　夜半にや君がひとりこゆらむ

この歌を吟ずれば、貞婦の、夫を思ふ情を感ずべし。

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや
　ゆきふみはけて君を見むとは

この歌を吟ずれば、君子、故舊を忘れざる情を感ずべし。其の外、數首をもて、例していはゞ

久方のひかりのどけき春の日に
　しづこゝろなく花の散るらむ

朝日かげにほへる山のさくら花
　つれなくきえぬ雪かとぞ見る

うちしめりあやめぞかをる郭公
　鳴くや五月あめのゆふぐれ

庭のおもはまだかはかぬに夕立の
　空さりげなくいづるつきかな

夕されは門田の稲葉おとづれて
　あしのまろやに秋かぜぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまより
　もれいづる月の影のさやけさ

津の國の難波の春は夢なれや
　あしの枯葉にかぜわたるなり

駒とめて袖うちはらふかげもなし
　佐野のわたりの雪のゆふぐれ

是等の歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るが如く覺え侍り。折にふれて、是を吟詠せば

襟懐を清くし、塵想も消えぬべし。西行が、わが佛法は和歌によりてすゝむといひし、さもありなんかしといへり。されば、和歌のすてがたきは、こゝにあるべし。但、このごろの歌は、あたらしくいひいでゝ、一ふしをかしく聞ゆるはあれど、言葉の外に、けしき覺えてあはれ深きはなし。いかでか人の心を感興する益あるべき。たゞ、詞にのみもとめて、情に本くといふことを知らぬなるべし、何事も、風俗の衰へゆくまゝに、浮靡に流れて。實をとり失ひぬるこそ、なげかしき事なれ詩歌のみに限るべからずとなり。

一種物あはせ（第二）

一種物といふことは、百練抄、帝王編年記等に、村上天皇の、保延四年十月、殿上に、一種物の事

ありしよしを記し、小右記、春記、中右記などにも、散見したれば、堀河天皇の頃まで、盛に行はれし事とおもはる。さて、そのさまは、續古事談に、殿上の一種物はつねの事なれども、久しくたえたるに、崇徳院のすゑつかた、頭中將公能朝臣は、絶えたるをつぎ、廢れたるを興して、神無月のつごもり頃に、殿上の一種物ありけり。云々頭の中將の一種物は、はまぐりを籠に入れて、うすやうをたてゝ、紅葉をむすびて、かざしたり。蛤の中に、燒物を入れたりけり。瀧口、これをとり。殿上にまですゝむ。主殿司傳へとりて、大盤におく。頭中將とりて、人々に配られたり。人々どりて、興しあへり。こと人々、多くは雉を出せり。主殿司とりて、立蔀によせたつ。信濃守親隆大鯉を出せり、庖丁の座におきて、御厨子所の頭久長を召して、とかせむとするに、その事に堪へずとて、切らず。御鷹飼の府生敦忠、鳥を肩にかけて參れり。小庭に召して、庖丁せさす。一二献藏人季時信範すゝむ。少將資賢、たけの葉におく露のいろ、といふ今樣をうたふ。藏人辨朝隆、三献の土器とる。又、頭中將のすゝめにて、朗詠をいだす。佳辰令月の句なり。云々。朗詠雜藝、數反の後能出でけり。殿上にて、人々連歌ありけり。又、同書に、大入道殿(兼家)攝政におはしける時、法住寺のおとゞ(爲光)よりはじめて、多くの上達部一種物をぐして、まゐりあつまり給ひけり。かねて、契りありてなるべし。閑院の大納言(公季)は、銀の鯉の腹の中に、こなます折櫃にいれて、入れられたり。小一條の大將(濟時)は、銀の鯖鮎の桶に、あゆを折櫃にいれて、入れられたり。左衞門督重光は、酒一瓶に、雉一枝、春宮權太夫公季は、銀の菓餅、修理太夫懷遠、組、云々

とあり。これにて中絶したりし事も、一種物といへるものゝさまも、かつ〴〵うかゞひしらるべしさてその後、程なく保元の亂にまぎれて、あと絶えたるも、かへりて武家には、その餘風の殘りて東鑑建久二年九月廿一日、稻村崎邊に出でたまひて、小笠掛の勝負あり。各、一種一瓶を具する事と、見え、又同三年八月廿四日、二階堂の地に池を堀らしめ、將軍家監臨す。歸るに及びて、行家の家に入り給ふ。義澄以下宿老の類、一種一瓶を持參す。などあり、又壒嚢抄には、イッスモノト云ハ何事ゾ、常ニ鳥目廿文ノ厚サ一寸アル故、本文、各、出スヲ、一寸物ト云リト云フハ甚下賤ノ僻事ナリ。一種物ナルベシ。一種物ト云事ハ朝廷古來ノ詞也。喩ヘバ、各、一種ノ物ヲ隨身シ、殿上ニ於テ興宴スル也。此事、昔ハ常ニ院宮ニ於テ有ケル也。云々。と見えたり。そも〳〵この一種物たるや、おのも〳〵めつらしき意匠を凝らして、互にまけじと競ひつるさまは、前に引ける書等にて明なれども、いまだそのまさり劣りを定めあらそふ事は、物に見えず。さればにや、黑川大人の、競物名彙にも、載せられざりしならむ。さてこの一種物あはせは、ふりにしあとにならひ、新しき趣向を加へて、維新の前つかた、塙氏の和學所におきて、執り行はれぬるものなるが、いにしへ今にめづらしき業にしあれば、あはれ漫錄欄内の、一種物とも見たまひて、よとてかくはうつし出でて、寄せまつるになむ。

遠江　松竹莊主人



（未完）

女子の學問

さいぐさ眞辭

物學せぬ女は、智開けぬまゝに、物のことわりを辨へず、世に處し、事にのぞみて、するわざに、正しき道を得ぬこともあれど、其の心術は、中々に、直く正しくて、飾らずかざらさる、自然の誠を存じ、貞淑温良の德をさへ備へて、女の道を得たるが多し。物學したる女は、智開けて、物の道理くらからず、世にたちまじらひ、事を處するに當りても、をさ〳〵、とゝこほりなづむ事なく、内を治むるわざは、更なり。外に當りても、男子にたち優る程の、いみしく賢き者もあれど、さて、その心だては、如何にと見れば、いつはりかざりをのみ、旨として、自然なる、天性の誠は、次第にきえうせ、表面には、貞淑温良の風をよそほへど、裏面は、いとさがなくて、女の道を失へるがいと多しと見ゆるは、僻目にや。

文をこそ讀まね。こちたき、物の道理をこそ敎へられね。家庭に在りては、身のほど〳〵につけて、世に、物なれし父母の敎を受け、其の言の葉を守りつゝ、人となり、廣く、世の事物の理を究め知らねば、心に、迷を起すこともなく、其の性を曲げらるゝ事もなく、女の道はかくのみぞ。女のわざぞ、かくて足りぬと、たゞ一すぢに思ひなせば磨かぬ玉の光なけれど、性質の美は、そのまゝにて存するなり。

なまじひに、物學せるは、たゞ、利巧にのみはせて、父母尊長のいふ事をば、かたくななりとのみ思ひなし、世には、かゝる事あり。かゝる道もあり。さては、かゝる理も出で來むなど究め盡して横さまにさへ考へわたし、おのが心のおもむくま

まに、いかなる事をもちふるまはんとては、理を設けてかざりなし、過あれば、言を巧にしておほひかくしつゝ、智といふ利器をぞ、あらぬ方にのみ用ゐなせば、性質の美は、おのづからにおほはれて、あしくのみなりゆくなり。

さては、學問敎育は、たゞ、邪智奸才を長ずるのみにて、女には、不必要なるべきかといふに、決して、然らず。未來の大國民たらんもの、賢母良妻を得んには、敎育による外なかるべし。たゞ、その道を得んことを望むにこそ。もし、今の世に當りて、前にいへるが如き弊害の、幾分にても存すとせんか。これ、敎育の、道を得ざるによるなり。方今、敎育の制度、大に備りて、女子敎育の大家も、世に多しと稱せらるれど、おのれは、その敎育の、果して、道を得たるものなるか。大家といはるゝ人の德の、感化を普くする力あること、父母の、子に於けるが如くなりや否やに、疑なきこと能はず。これ、また、おのが僻目にや、敎ふる者の上は、とまれかくまれ。學ばんと志せる媛等よ。たゞ、その誠心を失ふことなく、智を研き、德を具へて、ます〳〵、天性の美質を發揮し、皇國の民の賢母良妻たるに恥ぢざらんことを心がけ給ひてよ。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の二）

白松園主人

簓江が、女性としての美は、既に此くの如し。而して其の父忠重は、性殘毒にして女に似ず。初め爲朝の威を畏れて、簓江を進めて妾となし、爲丸、朝稚、島君の三兒を生みしが、ひとゝせ、爲朝諸

ぐ々の島々をうちめぐりて、日數を重ねしほどに、忠重忽ち義を忘れて、その歸らぬを幸とし、敵方に媚び附きしが、凡そ一年あまりを經て、爲朝圖らず歸り來りぬ。彰江が其の留守に處せし心をいへば、

爲丸、朝稚、島君、もやゝものごゝろなしり給へば、兄弟日毎により集ひて、父君はいづちにかおはすらむ、けふは歸り給ふべきか、翌は音信あるべきかと、問はるゝ母の胸ぐろしさは、つゝむにあまる袖の露の、おきどころだになかりけり。

爲朝恙なくて、歸り來るよし風聞せしときの心を描きて曰く、

彰江はやく之れを聞きて、こは夢にてはあらざるか、和子たちも歡びたまへ、父上歸り給ふぞよ、わが父にも知らせ進らせよとて、人を忠重が家に走らし、三人の和子を伴ひつゝ、郎黨島人もろともに、磯邊近くたち出でゝ、あれか是かと漕ぎ來る船を、まつ間ぞいとゞ長かりし。

こはなべての婦女子の情にして、別に珍らしきにはあらねど、猶、爺が邪惡に染まずして、わが父にも知らせまゐらせよ、といへるなど愛すべき女性ならずや、猶、馬琴は篇中第一の女性ともいひつべき彼をして、その美を缺かしめざらんがために、女子が先天的特性として、尤も難しとする處の嫉妬心なかりし事を證して曰く、

和子たちの歡びはいふも更なり、彰江は去年よりの心づくしを、これかれと聞ゆまゐらすれば、爲朝も亦長女が事、太郎丸二郎丸の事を說きしらし、(長女とは爲朝島めぐりの時幸せし女にて太郎丸二郎丸といふはそれが生めりし子なり下なる鬼夜叉といふは長女といふが父なりと知るべし)鬼夜叉を呼出して、これなん長女が父にて……鬼夜叉と呼ぶなりとて、彼親子が心ざまの信やかなることを告げ給ふに、彰江は妬しとおもふ氣色もなく、……わが身の物を思ひつるに比ぶれば、ひとり彼處に留りし、人の歎きも痛ましく、……

爲朝、忠重が盟を破りて、敵に通せしを憤り、之れを詰責せしに、忠重、却りて抗言せしかば、爲

朝甚だ怒りて、士卒に令して、十の指を斷り落し、その家に追ひかへしぬ。噫彭江が心のうちいかなりけむ。馬琴、例の優美の筆を振ひて、その纏綿の情を寫すこと、甚だ沈痛なり、

彭江は廊より、つくぐと目送りて、かくあるべしと思ひつゝ、諫めて聞かぬ父の非は、かはりて打れん、笞はあられど、わが身を切らるゝ思ひにて、人なきかたへ泣きにゆく。げに鬼の子の發出の、袖いかばかり濡しけむ、浮世の人の心のみ、親にはたねて似ざりけり。

嗚呼、其の貞、其の孝、實に此の如し。而して、其の孝貞の處し難きこと、平重盛が進退維谷まるといひしより、難きことあるも、更に易きことなし。吾人は讀んで左の條に至りては、泣かざらんと欲すとも、そゞろに袖を濕さゞるを得ず。

……父忠重が、往きに罪を得てしより、この三四年は蟄居て、かゝる席には列り得ざるを、いと本意なく思ひしかば、事の叙に、忠重が罪を宥め給はんこそ、ねがはしけれさて、頻りに申出しかど、爲朝左右なく聽入れ給はず。されど彼が孝心も默視がたくやおぼしけむ。第三日めに至り、(爲丸の元服祝ひありし也)忠重を將て參れと仰せて、鬼夜叉をつかはし給へば、彭江は愁の眉根をひらき、免しがたきを免し給へば、腹あしかりし父なりとも、いかでか志を改めざらむ、皆是れ君の御惠なりと謝し申して、もつぱら父が出仕をまつほどに、しばしありて鬼夜叉かへり來つ、爲朝のほとり近う參るを、彭江は待わびたる氣色にて、いかにわが父は思ひがけざる御使を賜りて、さこそ歡び給ひけめ、などて御身ともろともには參り給はざる。こぞに今年によるとし浪の、六十の坂も越ね給へは、老のいたづきに起居も自在ならざるか、いと心もとなしと問ふに、鬼夜叉はいと苦々しきおもゝちにて僕忠重が宿所に到りしに、家の內には人ひとりもあらず、その分野あまりに不審ければ、あたりなる島人に問ふに、たれくも定かにはしられど、昨夕俄に獵船一艘失せたり、是彼思ひあはするに、忠重おのが耶黨を將て、伊豆の國府へ走りたらんといへり、しかればゆゝしき事にこそと思ひて、直に走りかへり候と申すにぞ、彭江は思ふに違ひて、怨壇に頭うちあからめ、手を額にくはへつゝ、さ

しうつむきて居たりけり。…………

あはれ、八面玲瓏ともいふべき、彼が心の花は、爛熳として、あらゆる美性を具有せり。彼れは遂に情迫りてはいふこと能はず。死をもて赤心を披せ遜んとせり。

…………忠直嗚呼の白徒なりといへども、彭江が年來のまごゝろは、われよく知れり、今父と共に國府に走らんとならば、速に身の暇をとらすべし、更に恨みなしと宣へば、彭江涙さしぐみて、こは思はざることを聞ね給ふ、いにしへにも、君がひと夜の情には、妾が百年の命を惜まずとこそ聞け、さてもかくても疑を、解くべきよすがもなき身なれば。只面のあたり刃に伏して、君の情に答へ奉らんといひかけて、傍ちかなる短刀をとつて、既に喉を刺んとすれば、三人の和子たちその手にすがり、よゝと泣いてとゞめ給ふに、彭江も堪へかねて、一聲高く泣き沈めば…………

實に、吾人も高く泣きて、彼れに同情を表せざるを得ず。愚痴なりと云はゞ云へ。吾人は、實に彼れが如き心性の女を得て、眞の美人といはんとす。嗚呼、馬琴が眼中に映ずる美人も、實に、明治の美人が、取りて以て摸範とすべかりけりな。

爲朝足利義康と約して、其の子朝稚を送らんとせしかども、物議を憚り、わざと朝稚が過をこしらへ、折柄つくれりし紙鳶に括りつけ、半天に揚りし頃、糸を切りて、生死を天運に任せんとせしとき、九歳なる兄の爲頼、(先きの爲丸なり)並びに五つなる島君の、父を宥むる所の文、あまりにおもしろければ、序にてゝにあぐ。猶、彭江の言をも擧げんがためなり。

爲頼おそろ〳〵、父のまへに額づきて、御憤の甚しきに、さかう申さんは畏けれど、出づるにも入るときも、兄弟三人にて、きのふまでは暮し侍りしに、朝稚なくなり給ひては、あすより後はなか〳〵に、慰むかたもあら海の、そこはかとなくいたづらに、うらがなしくぞ侍るべき。されば此の爲頼を、おもふままに縛たして、朝稚をゆるし給へ、それも亦かなはずば、兄弟

もろとも紙鳶の綱手に引れてわだつみの、底の水屑となり侍らん、事の起りは爲頼が紙鳶を造らして、よしなき遊びをいたせしかば、弟をばうしなひ侍る、さて何とせん淺ましとて、己を責めて罪ばかりも、親を恨ぬ孝行の、おなじ思ひに島君は、いふこともまだいはけなく、死したまへとばかりに、かたみがはりの袖の雨、霽間はさらになかりけり。

更に、彫江の歎きを叙して曰く

これを聞く彫江は、友音によゝと泣沈み、同胞にておはせばこそ、汝出るへも忌み嫌ふ、死をだも怕れずもろともにと、誓ひ給へる健氣さよ、いかに猛きが武士の、常なればとて情なし、地を走る獸、天飛ぶ鳥も、子をおもはぬはなき者を、心づよくもおはするかな、彫江が身にかへて、救はでやはと怨ずれば……●

而して江は、もと爲朝の意中を知れる者なり。

旣に、紙鳶の糸を切るに及び、爲朝に稟して曰く、

彫江はらはらと落涙し……紙鳶に括り着け、命運を神に任して、下田に赴かし給ふ計畧は、世を憚り名を惜み給ふ、賢慮のいみじきに出でたれば、いかで恨み奉るべき、されど君の御子なりとも、妾が腹に出で來給へば恩愛はかはらぬ者を、よそよそしくつゝみ給ふ、御こゝろのうちおぼつかなく、いさゝ心ぐるしくも、ほいなく侍り。

（未完）

消息文十二種

隨菴生

（一） 新井白石より岡島仲通におくりし文 （長女の婚嫁について）

新井白石は、德川時代の碩學なり。名は君美、字を在中といふ。白石は其の號なり。久留里侯に仕へし新井正濟の子なり。幼より穎悟なりき。三歳の時。能く大字を書し、七歳の時、父母と戯劇を觀たりしに、歸りて之を語るに、一も遺忘する所なかりきとぞ。十歳に及びては、常に、主侯の側に給事し、侯の文翰を書せしが、旣に、老成に異ならざりきと。長ずるに及び、倜儻不羈にして、膽氣あり。嘗つて、慨然として歎じて曰はく、大丈夫生きて封侯を得ずむば、死して當さに閻魔王となるべしと。

既にして、節を折りて書を讀む。江戸の豪富河村瑞軒、白石の人となりに感じ、其の孫女を娶せ、且つ、三千金の地をおくりて、勸學の資とせむことを請ふ。白石曰はく、昔池中に一小蛇ありき。人之を捉へて、針を以て其の腮を傷く。俄に大龍の邊に死するものあり。即ち嚮に池中にありし蛇なり。腮を見るに、其の傷尺に餘れりといふ。瑞軒今、其の孫女を以つて、余が妻にせむとす。是れ即ち小蛇を傷くるものなり。後來、われ後を興すに至らば、其の傷、豈に尺餘にとゞまらむと。遂に從はざりき。

此の時、白石甚だ貧しかりき。然れども、苦學かつて怠らず。能く、經史百家の書に通ず。

後、木下順庵の門に遊び、該博を以て稱せられたり。順庵、嘗つて之を加州侯に薦めむとす。たまたま加州の人岡島仲通、白石に、國に老母あることを語りて、自ら代らむことを請ふ。白石、即ち、之を順庵にはかり、仲通を薦めて加州に仕へしめたりき。

元祿六年、德川家宣いまだ甲府の藩邸にある頃、白石辟されて其の儒となりぬ、家宣入つて宗家を繼ぎ將軍となるに及び、祿五百石を賜ひ、文學を以て殿中に給事せしめ、事大小となく、必、召して之に諮りきといふ。正德元年從五位下に叙し筑後守に任ぜらる。其の十一月、祿を倍して千石を賜ひき。

後家宣薨じ、幾ばくもなくして、儲君亦薨せしかば、即ち、仕を辭し、門を杜ぢ客を謝し、日夜典籍を以て樂とし、享保十年五月十九日卒せり。年六十九。

著書三百餘種、皆、世を益し道をたすくるものなり。

讀者諸君よ。まづ、この傳をよみ白石の人物の大略を知り得て、然る後に、其の消息を玩讀したまひてよ。いかに、世の人の親の、子のためには心を砕くかを、知ることを得む。

一昨日申上げ候事につき、一昨日は委細の御書面御心を盡され候段、例の事とは申しながら、御篤愛の程、謝する所を知らず候。占絲の一事に付、種々仰せ下され候趣、一々、其の理を盡され候事に候。愚簡も種々存廻らし候に、兎角、快からぬ事に候と存じ候故に、決しがたく、高明を仰ぎたる事に候。思召も、また、如此に候上は、此の一

事に於いては、愚簡もわやまらず候歟と、先以て疑を決し候。さて、此の上のこと如何と存じ候に、御紙上に、尊兄、某身に御なり候ても御料簡候に、尊兄に候はゞ、上交の義に任せ取組れ候はむと思召し候。但、此の上候はゞ、一應人謀を盡したく思召し候條、謹で奉教諭候。御相談をも申上げ候處は、此の一段に有之候。尊兄、かほどまで御心を盡され候上に、某に御なりかはり候うて御料簡候に、右の通思食候と有之候上は、某、いかやうの所存候とも、非所存に執し候うては、御相談の本意は失ひ候と申すものに候。とにもかくにも、尊兄御教諭に任すべく候事勿論に候。其の上、又、洪範稽疑にも、從逆の多少により、内外靜り候に付いて、吉凶も同じからず候。然れば、某一人の心に決する事になく候へば、老妻へ得と申し、弱女にも申させ候ふは、某弱冠のむかしの事はさておき、室をもたもち候より以後の事は老妻經歷の事に候。種々艱難の事どもは、かねても承りも及ぶべく候。しかるに、不思儀にて、前々代御恩により、如此の身ともなりたるにて候。これらの事、某一身の福にもあるべからず、老妻も亦其の福有之故と相見えたるにて候。右の通のもいゝ子の事に候へど、御直參にて、所領の地をも領し候ほどの人の妻に候へど、これ又、幸の至に候へども、すこしも、祿の重く候人にと存じ候ふは、今は身のむかしを忘れ候うての事にはなく候。男子は、其の才德により、いかにも身を起す事もある事に候。女子は、夫次第のものに候處に近代のならはし、一色の御役に撰むれ候も、とかく、一石も祿の重きかたを撰ばれ候やうになり來り、たとひ、才覺行跡よく候うても、小身なるは加増入り候とて、埋れ居られ候人々多き事に候。

しかれば、祿薄き人にかたつき候上よりは、一生此の身上にてよく候と覺悟仕り候はねば、毎事につけ候うて、心もやすからず。又、それにつけ候うては、親にて候ものも、ふがひなく候故に、かかるめをも見せ候なども存じ候へば、父子の恩をも、そこなふ様にもなり候ものにて候故、是等の事を、親の身にては存廻らし候うて、右の如く少しも祿厚く候はむ人をと存じたるに候。五百石をも領し候人に候へば、某もとの身の事は申すに及はず、飯田町に罷在りし時の事を存じ候へば、同身上に候。其の時の如くに候うて、事たり候とだに存じ候はゞ、相談仕るべき事に候間、此の所母子にも、得と決すべく候必ず無理にしひ候事にはあるまじく候、と申聞かせ候ひき。然るに、弱女申し候ふは、親にて候人、至らぬ所もなく不便に存ぜられ、種々心遣の事は見及びたる事に候。なに事によらず、親の存じ廻らされ候所、なにか子の身のため悪しき事これあるべき歟。いかやうの事に、かたつけ給はり候はむとも、すなはち、其の恩にて候へば、此の後にいたり。いかやうの艱難に至り候事候とも、其の段は、一身の不幸の天分に可有之、少しも悔ましき事あるべき事に無之候間、此の方の事には構なく、いかやうにも、父母のこゝろまかせに可然事に候と、返答仕り候。さて、母には、いかゞ存じ候と尋ね候へばこれも某料簡の外に何事か可有と、ともかくにも、某料簡に任せ候よし申し候間、此の方にも、行末の事までは人力にては知りがたき事に候故、さきだちて、蓍をもより見候に、あしきまでの事もなく候へども、十分の事とは見えず候。但し、むかしも、卜筮に三人占ひて二人の言に隨ふとも有之候。此の上は、其の方ども心を、また占を

もちて決し候ふべく候。如此申す事は、兎にも角にも、後の悔なきためを申すにて候。此の事をくり返しかへし申し候事も、決斷のなき事のやうにも存ずべく候へども、某身にわたりて、妹の事において、殘念に存じ候事有之故の事に候間、申候事に候と申聞かせ候へば、承屆け候由にて、老妻は、昨朝、關帝占をとり老妻母は、元三大師へ參詣仕り、鬮をとり、これをもつて某に決し候へと申し候。占辭とも左に呈し候。

關帝籤第十九

嗟子從來未得時　今年星運頗相宜
營求動作都如意　和合婚姻誕貴兒

觀音籤第四十

中正方成道　姦邪恐〔必〕慾慾
壺中燄妙藥　非久者煩煎

右の通に候。いつもの事ながら、關帝籖の第四に、婚姻の二字あらはれ候事、誠に響應のごとく肝をつぶしたる事に候ひき。觀音籤の趣も、ひしと籤の辭に相似たる事に候。第一二句艮の九三の如く、第三四艮の六四に似候が、いづれを見候うても、大凶は見え來らず候。しかれば、大方、龜筮の間一從一逆をかけくらべ見候に、堪忍頃の事に候と存ぜられ候。老妻をはじめ、或は籤をもとり、或は鬮をも取り、參詣候などゝ申すも、其の心には、籤と鬮とだにくるしからず候はゝ、これにも決し候はむと申す事も見え候へど、人もしたがひたりと申すべく候。尊兄御敎示の如く仕るべく候うて、人謀も亦盡し候故、此の上、とかくを申すべき事も無之候間、すなはち、昨夕彼の媒妁の人へ、いよ〳〵、先樣の挨拶を承屆け給はり候へと申遣し候。此の上に、同心の返答候はゝ、いよ〳〵取組申すべく候。天緣無之候はゝ、さだ

めて、先様より、なにか異變の事も申來るべく歟。事長き事も恐入り候へども、一昨日の御書面、あまりに忝く存じ候故、愚考をも、事の次第をも、殘さず御知らせのため、此の如くに候。

尙々、事長き事御覽候も御むつかしく、特に、御知らせの事に候間、貴報におよばず候。御口上にて承るべく候。

茶話それ〳〵草

木崎得玄

女鑑家政欄内にて、茶道の筆致に從事せしより、既に數年にわたりぬ。帛紗さばき茶筌湯治の發端より、今の茶禮初學に至る間、其の苦心精勵は、實に容易ならざるものありき。然しながら、讀者の諸孃令閨方、また、熱心に閲を賜はるは、厚く感謝の意を表する所なり。

然はいへ、多數の中には、規則ぜめの茶のみにては、少しは、うるさしと思ふものも、おはすらむなど思はぬにもあらざりき。このごろ、藏書の中より、幸にして、茶話それ〳〵草といふを見出しぬ。是なりけりと、茶禮初學の間の手に、つぎ〳〵うつしいたすことゝせり。是は京都の人木崎得玄といふ人の著にて、得玄は、文化の頃の人なり。

茶話は、茶事を學ぶ人のためには、また決して、すつべからざるものなり。

孤峰菴碌仙齋川上不羨

關　葦　雄　志るす

論語に、紫の朱を奪ふをにくむとあり。伏しておもへば、今樣の古風をみだること其の例多し。ことに、茶道は禮讓質朴を主として、身を正くし心

を潔くするの趣なるを、却て、香の媒として、家を破り身を恥しむ。所詮他の屋上の草はせんかたなし。おのれが門前の塵を拂ひなん紫のために、正しき朱をうばはるゝは、口をしき事ならずやと、ひとり悟り顔して、近江の國の山里に茶事を樂しむ人ありけり。此の人おもひけるは、山崎妙喜庵の茶室は、正敷、宗易の作爲なれば、とし比みまほしく、ことに、心にまかす骸もちながら、今にはたさざるは、近國に住む甲斐なしと、己とれのれをいさめて、奴一人に旅の調度からげもたせて、吾が里を立出づ。秋の日短しといへども、さらにいそぐべき道にもあらず、たよりよき茶店にやすらひ、清らかなる芝生にいこひて、山谷の秋づく色を眼の及ぶだけ眺め、野もせの虫の吟ずるに耳のとゞく迄かたむけ、逍遙しながら行けども、後へは一足も歩まねば、近江は遠く八はた山崎は近

くみゆるに、山を後とし水を帶として、古き松の苔むし老たる杉の枝茂り、萩薄は狐の臥塲と見え、谺のひゞきにこそ氣味わるく只ものすごく、名もしらぬ草のみ人の肩をこしていふせけなる邊に、ひとつの庵の見えける程に、是にたよりて、道の案内求めたくうかゞひ寄れば、柴門竹垣などしつらひ、佛に仕ふる人とも見えず、路次に水など程よくうちたてゝ、松風にもあらで釜の沸る音の靜に聞ゆるは、茶事を好む人と見えたり。かゝる離家にふしぎの數奇人なり。さあらば、此の所にて且座喫茶し、暫く勞れを休めむと、案内し、是は他國より山崎妙喜庵へ尋參るものなるが、道に踏迷ひ難義のいたり、道の案内も承りたく、別しては、釜の沸る音の聞ゆれば、一服の所望もゆるしたまはゞ、廣大のよろこびといへば、翁答へて、やさしき旅人哉。しふくと、一服ものせん。こなた

への挨拶にしたがひ、飛石ひとつ二たつ三疊敷にいたる。

（未了）

爐邊獨語（二）

白松園主人

○苔の雫

今よりは、七年ばかりのむかしになんありける。大津郡俵山の温泉にものし、折、やんごとなきおん跡を拜みまつりき。

俵山を距ること一里半許り、豐浦郡地吉村大石といへる所に、路邊に一丘あり。樹木鬱蒼として、葛蘿生ひしげり、一段高き處には、亂石を疊りて、苔むしたる石の玉垣見ゆ。さて丘を回らすに柵を以てし、左右なく人を入れしめず、禁制の札及び石碑ありて、御陵傳説地と記しゝは、明治十八年、山口縣廳より建てし者なり。こはこれ、如何なる御方の御陵にや。おのれ一切之れを知らねば、此處等の事に精しき人に就いて、之れを聞くに、掛卷も恐き

養和の帝の、御尸を隱しまつれる所なりとぞ。今、其の口碑に傳へ奉れることを、いさゝか拾ひ集め記し奉らんに、往古赤間の海に、入水し給ひし時、玉體を求めけれども、更に、おんゆく方の知れざりければ、大津郡澤江浦なる大敷網を、壇の浦へ廻送せしめて、捜索したりけるに、果して網に罹り給ひぬ。澤江の漁夫等、いたくかしこみ、且つはよろこびて、我等の網に罹り給ひし故、我等葬るとて、今の大石と云ふ處に至りしに、駕籠は忽ちひた、と坐りて、動かすべうもあらざりける事ぞ不思議と術なきに、遂に其處に葬り奉りきと

は、云ひ傳へたる。當時は澤江浦を以て本浦と唱へ、此處に限りて大敷網ありて、諸般の漁具も、悉皆具り居り、其の他の浦は未解にて、いと幼かりきとぞ。

一說に御入水後、御尸不明なりしに、程經て、仙崎浦の鯨網に罹り給ひければ、馬關へ送り奉りし時、大石にておん駕籠に、止りしなりとも云へり。されど、こはいと疑はしき說なり。馬關壇の浦にて、入水し給ひし者が、響灘を過ぎて、仙崎へ漂ひ給はんやうなし。然るに猶訝しき話あり。そは、仙崎地村大比々といふ處に、尼寺あり。東、山を負ひ、西、海に面し、緇衣圓顱の比丘尼、數十人あり。尼寺とし云へば、其の名縣下に高き寺なり。年若く容醜からぬ女の、あまたあるが中には、富家の女もありとぞ。如何なる故もて、早く世捨人の數に入るにやあらむ。人若し行いて湯を乞ふことあれば、老尼出で來歡接す。又一たび男の手を離れざれば、直接に物を取らず、男女の區別正しきに似て、道心堅固に見ゆる者から、底の眞淸水酌み難しとぞいふなる。實家に物を取りに往いて、囊を負ひて皈るあり、あるは托鉢に出づるあり、そのさま見る目もいとおかし。さて此の寺の本尊は、木舂を二つに割りたる上に、小兒の佇む木像なり。古くより傳へて云ひけらく、大比々海岸に、上利と云へる處あり。古へ養和の御門、入水なし給ひし時、小兒の屍、此處に漂ひ寄りけるを、浦人拾ひ上げて見るに、御容貌を始めとし、御衣のさまに至るまで、さながら凡人に非ざれば、此は帝に疑 あらじと、皆々いたく恐みて、下に据ゑんは恐れありとて、木舂の二ッになれるがありければ、即ちそのうへに据ゑ奉れり。此れ尼寺にある所以にて、御跡を吊ふためなりとぞ。かゝれば

御尻の上りたまひしゆゑ、そこを上利と名づけしなり。現今上利をもて氏とせるもの多く、中にも宗家とも稱へつべき、上利某は、最も舊家の聞えありて、古き書類を藏め居りと云ふ。孰れか信に近からん。

あはれ此の墳墓よ。いかなる人の亡き跡ぞ。床の前に苔蒸せる、千代の巖にこと問はゞや。



樂 園

まことの樂

内の樂を本とし、耳目を以つて、外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感ずれば、其の樂かぎりなし。此の樂、朝夕つねに目の前にみち〳〵て、あまりあり。これをたのしめる人は、すなはち、山水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず、たからもて買ふにあらざれば、一錢をつひやさず、心にまかせて、ほしいまゝにとりて用ふれどもつきず、つねに、我が物として領すれども、人いさはず。いかんとなれば、山水風月の佳景は、もとより定まれる主なければなり。かく天地の内きはまりなき樂〻りて、たのしめる人は、富貴の驕樂をうらやまず。其の樂、富貴にまさればなり。此の樂をしらざる人は、樂しむべき事、目のまへに、つねに、みち〳〵ておほけれど、其の樂をしらざれど、樂しまず。世俗の樂は、其の樂いまだやまざるに、はやく我が身のくるしみとぞなれる。たとへ味よき物をむさぼりて、ほしいまゝにのみ

くへば、はしめは快しといへど、やがて、病おこり、身の苦となれるが如し。凡、世俗の樂は、心をまよはし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂は、まよひなくして、心をやしなふ。外物を以つていはゞ、月花をめで、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、其の樂淡ければ、ひねもす樂しめど、身にわざはいなく、人のとがめ、神のいさむるわざにあらず。此の樂、貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は、其のをごりれこたりにすさみて、此の樂をしらず。貧賤の人は、此の二の失すくなし。志だにあれば、此の樂を得やすし。（貝原益軒の樂訓）



ねむけざまし

二世後咲譯

羞を識らぬもの

世に聞えたる資産家、あるは博士、さては、位たかき人々を、覩戚、知人らしく吹聽するもの。

自作の詩歌を、聲もたからかに詠みあぐるもの。

獨人中にて、『今ごろは半七ッさん』など、さても、あの方髭に對してさ、あきさろゝさまを、ひさりのみこみして、わが聲の喉には、感ぜぬものこそなかりけれさ喜びたん。むしろ、可笑しくもあらず。是は、男の上なれど、女の長唄常盤津自慢さなりては、おはなしの限にあらずなむ。

拙き手して、はしりがきするもの。手紙などは、肝要の用事さへ、おぼろげにて、腹たゞしくさへなりぬるや。まして、印の大なる小なる種々つくりおきて、額、かけものゝ料になど書き散して、いさゝか、羞づる色なきもの。小學校生徒の清書見よさも言はまほしくぞなりぬる。

人の知らむことを怕るゝもの

古人の名文を剽竊して、わがものがほに世間に出すもの。近來

は人の心、恥知らずなりて、斯ばかりのことを恥とも思ひたらす。一向に、すましたるものなり。

所謂ヘソクリ金のたまりし時。人が知りたらば蛙になれといひし昔話も思ひいたさるよ。

ふところ手して、鼠をひねりあてたる時。

つゝましき人の前にて、ならといふものを、プといはせし時。

スカシと称するものを物しゝ時　猶のことなり。オゝ恥しや。

これを思ふにつけても、オサツは、あまり食ふまじきものなりけり。

これは、イヤ、こまとに失禮。

栗鼠の三郎（第二回）

聽雪女史

春「マーソウデ御坐りましたか。いゝえ、私も今は氣樂で御坐りまして、食物は、どんな、いゝものでも、すぐに目つける事ができますが、も一此の様に、平氣では居られないのです。實は先程、ちよつと、御主人のお室に、參りまして、棚の上で、聞いて居りましたところが、お嬢さんが、今日も學校から、お歸りになりまして、わらほんとうに、白鼠のお春が、見えなくなつたので、私は淋しくて、何んだか、つまらないわ。どうぞお母さんに、お願申して、他の白鼠を、買つて戴なければならぬと、いつて居らしやうつたのです。そこで、私も同類が、いよ〳〵、この家に參りますと、何かと、うるさい事が起りますから、明日は、必つと、お嬢さんの、お歸りになります時分には、お机の上に、のぼつて居ませうと、思ひまするの。そうすれば、此の床下の、自由な巣は今晩きりなのです。何んだか、つまらないと、心細い、やうで御坐いますは。

三郎「それじや、此の巣の相續は、僕に讓つて、いたゞきませう。

お春「さう願いますれば、まことに結構で御坐います。私もお孃さんのお室に歸りますと、暫時は今迄のやうに、自由に、であるくわけにもまゐりませんから、私の爲にも、幸でございます。そこで、食物は、きつと、毎朝運んで



進げませう。

三郎「それじや、さうして下さいな。兎に角、今晩は更けましたから、泊めて戴きまして、明朝は、ひとまづ、山に歸つて、兩親に安心させて、參りませう。

お春「どうぞ、さうなさいませ。私は今夜の内に、よく用意いたしまして、明朝は、私も貴殿の御兩親に、差上げまする、おみやげを持つて御供いたしませう。去かし、三郎さん、私は申しわけておかねばならぬ事を、忘れて居ましたが、此の家の御主人は、犬が大そうお好きで御坐いますから、黒と稱びます忠犬が、飼はれてゐますが、スコットの生でございまして、馬鹿に猛いので。その上、ひどく吾々を、排斥いたします。それが第一に、危險なのです。どうです、御忍耐して下さいます

か。

三郎「よろしい。僕は、性來寝ばうですから、食物さへいたゞきましたら、晝でも、夜でも、ねてばかり居るでせう。わは、ゝゝゝゝ」

二匹はいろ〳〵、話して居ましたが、漸々に、夜が明けてまゐりまして、米倉の床下が、あかるくなつてまゐりました。

お春「三郎さん〳〵、お起きなすつては如何です。私は貴殿をお送り申します、用意をいたしました。私は今日は、何んだか、氣がせけてなりません。

三郎「ハイ〳〵、オヤ大そう、ねばうして、居ました、それは、どうも、御親切樣に、有難う存じます。

と、眼をこすり〳〵、禮をのべまして、いよ〳〵、出かけました。お春は圓い頭に、お菓子を澤山に積みまして、片手で、ちよつと、押へまして、後から行きますと、三郎は、栗だの、雞卵だの、いろいろ澤山に、慾ばりさがして、飛ぶことも、できない程に、もちまして、エッチラ、ヲッチラと、前に立ちて、まゐりました。やつとのことで、筑波山の、ふもとに參りつきました。

お春「さやうなら、三郎さん、此の進物は、こゝにおきまして、私は今から歸りませう。貴殿が、彼所にお歸りになりまする前に、私はゐなくなりますよ。何か承ります事はありませんか。さやうなら、お別申しませう、よろしう御座いますか、しばらくは、よくお目にかゝりませんが、貴殿は、今夕から、彼所に入らッしやいよ。

三郎「お春さん、何から何まで、御親切にして下さいまして、ありがたう存じます。いつでも、

貴孃と、彼所の床下で、自由に遊んで、ゐたいですが、仕方のないわけで、御坐いました。僕は必らず、お父さんの、勘氣が、今日許りるにきまつてゐますから、澤山の信用を得まして、彼所の床下に住んでゐますから、御安心して下さい。また、折があれば、毎日でも、お目にかかりませう。さよなら。

と、別を告げまして、せつせと、洞穴を下りてまゐりました。

三郎「ドン、トン、ト、御免下さい。三郎でござります。

父栗鼠「三郎とは誰ぢや。何の用事が有つて、音信した。

三郎「ハイ、實は寒い冬の空になりましたから、御兩親やら、お兄さんなどの、御起居を、おたづね申したいばかりで、こゝまで、從者のも



のに、餌食を澤山に運ばせて、お見舞にまゐりました。ちよつと、おわけ下さいませ、トン、トン、ト」

母栗鼠「オヤ〳〵、三郎か〳〵。よく歸つてきてくれた。今も今で、おまへの事ばかり、言ひだしてゐたのだ。機嫌でゐてくれたか。

三郎「コレハコレハ、お母さん、よく明けて下さいました。オヤ、お兄さんも、御機嫌で。僕も、あれから長い月日旅行して居ましたところが、おしまいに、良い朋友に出遇いまして、今度は、その朋友の、今日迄住んでゐました邸を、イヤ、巣を僕に譲つてくれましたので、食物も大そうありまして、私獨りで、食ひつくせないのですから、明日から、毎日わけて持つてまゐりませう。しかし、四五日はよくまゐりませんが、其の後は、御恩報じに、食物は、僕の方からおとどけ申しますから、冬期は、狼も、徘徊いたしますし、また、獵士も參りますから、御兩親さまや、お兄さんは、少しも外におでなさらぬやうに、お願ひ申します。僕は、少し氣せきでなりませんから、今日は、これで歸りまして、また、次に參りませう。さやうなら、皆さん御機嫌よく、入らしやい。

と、別を告げまして、三郎は、大急ぎで、馳けて參りました。





月前歸鴈　東久世通禧

おもしろくかすめるはるの夕月に
鴈のひとつらけしきそへたる

霞める空を鴈かへる　高崎正風

はる／＼とかすみにきえて行鴈の
聲をみおくるゆふくれのそら

めたか　鍋島直大

波風もたゝぬみいけにうちむれて
あそふめたかや樂しかるらん

夕春雨　前田利嗣

夕まくれやなきの糸に露みえて
おとなくふれる春のあめかな

旅宿春月　水野忠敬

草まくら旅のやとりもさむからて
のとかにゝほふ春の夜のつき

春山家　長谷信成

まつとなき都人にもとはれけり
花うくひすのはるのやまさと

野徑蝶　宮地嚴夫

とぶ蝶にみちひかれゆく心ちして
霞をわくるはるの野路かな

春魚　坂正臣

うろくずも散らく花にたはふれて
春はたま藻かしたにひそます

春獸　植松有經

雪とちる花の木かけにゑのころの
むれて遊ぶもおもしろきかな

望遠帆　鎌田正夫

帆影みな遥かになりぬわかともの
　のりて出しはいつれなるらん

里春月　　蜂須賀隨子

かすみたつころもの里は春の夜の
　月にきせたる名にこそ有けれ

春友　　鍋島榮子

すかのねのなかき春日と思はぬは
　友をつとへしまとゐなりけり

野遊　　前田朗子

つく〳〵し摘つゝゆけは春の野の
　長きみちともおほえさりけり

霞雲雀　　南郷柳子

そらたかくのほる雲雀の聲すなり
　影はかすみのたちかくせとも

のとかなる日濱へにいつ　　小池道子

さくら貝ひらふ濱へのまさこみち
　春は野やまにかきらさりけり

野春風　　柳原愛子

はし鷹のすゝなさく野の春かせに
　吹みたされて小てふとふみゆ

江上霞　　鳥尾廣子

よるなみの音はかりして住の江の
　松はらとほくたつかすみかな

海邊春月　　中島歌子

見返れはおほろ月夜になりにけり
　しほひかりせし浦のとはおさ

行路春風　　服部磯子

春風にさそはれいてゝいつこととも
　ところさためす行野みちかな

行路柳　　宮地小東洋子

幾人のそてをひきつゝとゝむらん

ゆきゝのをかのあを柳のいと

鹽原紀行の中

小川直子

鹽原に遊びける頃高崎正風大人のなり所にものしし時、いでや過ぎつる頃より契り置きにし事にしあれば、高崎大人の鹽原なるなり所に、あすなむ行かんと、御館を守る人までいひやりければ、つとめて家が宿まで、迎にさへ來れり。さらばと、打連れていでたつ。道すがら、山川の氣色もいはず、さまぐ〜に見所あれば、過ぎがてにのみ立ちとまりつゝ、青淵を臨みては、戰々たる思をなし、あるは、たきつ流るゝ白泡の白きを見れば、氷ならねど、兢々の心となりて、肝をひやし、いとめづらかに見つゝ行く程に、かれに見ゆる、かざして行く御館なりといへば、打ちあふぎ見るに、

いと、大人の家の名もしるく、いと高き山のなから計に、高らかなる御館の棟、木の間にそびえたり。かくまのあたりには見ながら、登らんとするには、はるかあなたの道よりひだりなる坂を下りて、畑下戸といふ里を通ひて行く所なりけり。爰より川原に出づれば、仮初なる柴橋の、いとあやふげなるを渡したり。これをわたりて、九折のけはしき坂路をたどるぐ〜登り行くに、夏木立茂り合ひてくらければ、すゞろ、ものすごき心ちす。此の日は、朝より空くもりてさへありければ、衣手いとひやゝかにて、夏ともなし。登り果てゝ、御館にいれば、まらうどの間には、山水のかたかける軸物、あるは文机などゆゑぐ〜しうつらねて、軒端には綠の簾かゝげわたされたり。げに、御歌所の長の君のなり所といはむに、あかぬ所ならみやびにしつらひ給へり。此の頃、大人は葉山にも

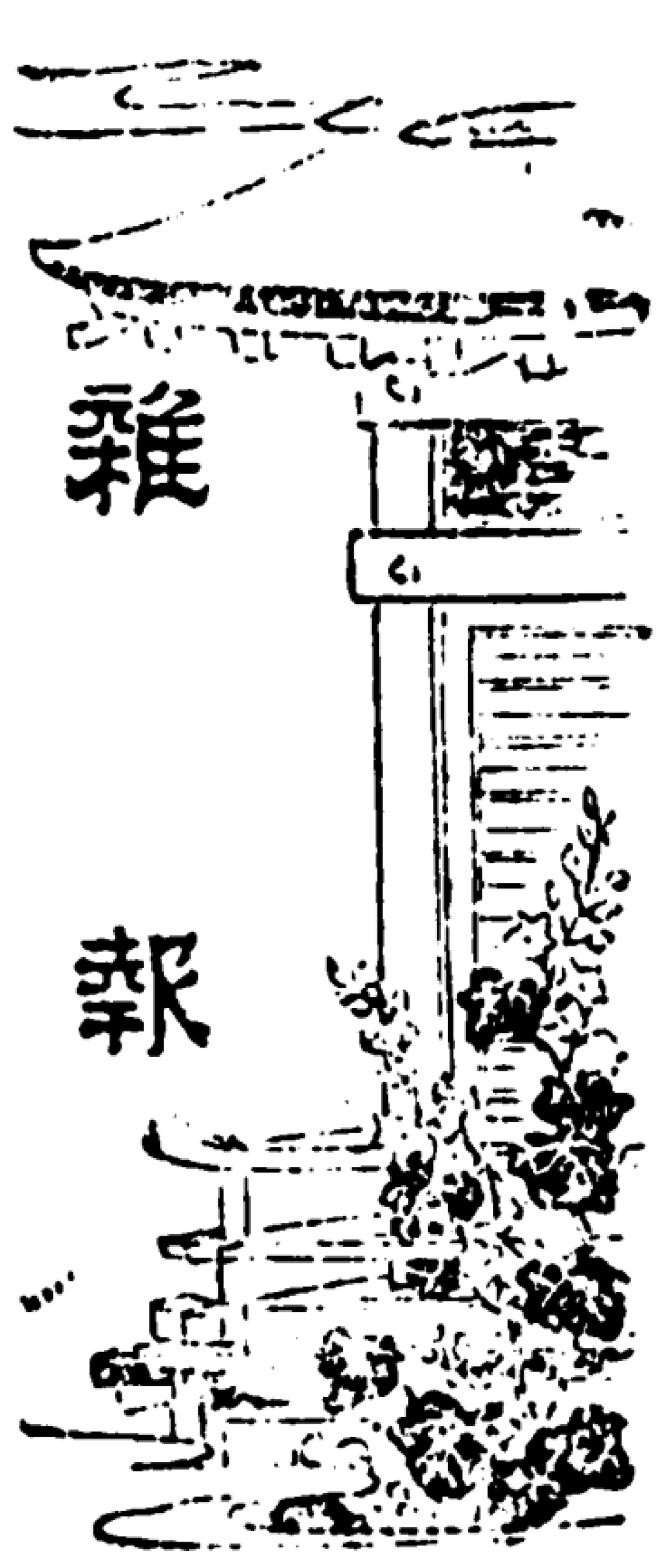
のし給へば、此の館には居給はねぞいとさう〳〵しき。さて、端居して遠く見やれば、白雲を凌ぎて、そびえたる峯は數しらず。つきたちたる石山あり、緑につゝむ松山ありて、其のかひより白雲のたち登れるが、こくうすく棚引わたれる風情、たとふるにものなし。近き峯だに、其の高さは幾丈ともはかられず。これはた楓の緑、色をきそひて枝さしかはしたるに、朝霧うすらかに打ちなびきたり。

かへる手のしけるみとりに鹽はらの
　千しほの秋もおもひこそやれ

此の中を流るゝ溪川、いとも〳〵ふかく、岩にせかれて、わきかへる水の色を見おろせば、目もくるめく計におぼゆ。さるを、心靜に詠めやる程に、活然として胸中ひらけ、心ゆく事限りなし。大人かひとひのみものかたりに、鹽原の秀美なる事は、たぐひ稀にて、只、仙境のごとしとのたまひつるを、思ひ出で、げにとおぼえければ

よのちりをはなれし峯に分いれば
　心は雲にのりてこそゆけ

かゝる勝地を見るも、大人が常に、ひと度は見よかしと、しばしすゝめ給へる御言のなからましかば、いかでとおもふに、忝なう、老の袂も露けくて、日のかたふくをも打忘れてなむ。



●御慶事餘聞　東宮殿下御慶事に付き、内外多數の人々より、夫々奉祝の誠意を表し、献上品を爲さんとする者多きも、中には名聞若くは、廣告

的の意味を含むものあるやにて、其の筋にても、此の邊に注意し居る由、既記の如くなるが、川口宮内次官は、此の程各地方長官に對し、左の献上者心得書を送れりと。

一　全く篤志者の赤誠に出づる者は特に御受納可相成内議に候

一　名聞又は廣告的の献品は勿論勸誘若くは競進が間敷義有之候ては御趣意に相悖り可申候

一　右の弊に陷ざる樣厚く御注意有之度候

一　献品の種類及び制限等は追て定めらるべきやも難計候得共古金銀又は巨大の石木等を除き可成紀念と可相成物品の方可然歟と存候

一　奉祝の誠意を御嘉納可相成事に付素より其の物品の輕重多寡に不拘義に有之候

一　飲食品等の如き一時消費すべきものは可成差控へられたく候

●紀念品下賜　こたび御擧行あらせらる可き、皇太子殿下御妃を娶さるゝ御大典御儀式に付ては目下、其の筋にて、種々調査中にて、特に御披露の爲め、大典御擧行の當夜、内外貴顯一千餘名を宮中に招かせられ、一大夜會を開かせらるゝ事、最も、其の重なる御儀式なりと承はるが、尙は漏れ承はる所に依れは、同夜參列の榮を得る内外各貴紳貴女には、御慶事御紀念の爲め、貴重なる銀製の紀念品を、一々御下賜相成る由。右に付、帝國技藝員は、目下、專ら、意匠を凝し居れりとぞ。

●紀念美術館　野村喜太郎、望月金鳳、小出正太郎、長沼守敬、高橋玉淵等諸氏は、今回の東宮御慶事に就き、祝賀の意を表する爲め、臣民よりは、種々の献品あるべきも、斯くては、其の筋にても、大に、其の取扱に困難なる可きを以て、旁々、斯ゝる芽出度御祝典を、後世に紀念すべき

有益の事業をなすに如かずとの趣意を以て、全國より、金五十萬圓を募り、之を帝室に納めて、紀念美術館を建造するの計劃を立て、去し十日、右の諸氏は、先松田市長を訪問し、其の趣意を述べしに、市長も同意を表し、一昨日宮内省に出頭して、田中大臣に面會し、委細を稟議したる所、大臣にも至極同意なれども、其の金額を宮内省に托せられ、若し不足等ありて、内帑より補足せざる可からず、又、一時建造したりと云ふ計りにては、何の甲斐もなく、一度建設したる以上は、之が維持の方法と面目を傷けざる考案なかるべからず、然るに帝室には、既に上野奈良京都の三博物館を有し、其の經費中々に尠なからざるに、今亦一個の美術館を増加せば、此の上御經費の増加を來し煩累を帝室に及ぼすが如き事あらば、臣民の本意に反することとなるべし。故に美術館の建設は美事なるも、其の建設及び、管理に政府若しくは、市に歸する方得策ならんか、云々と語られたり。兎に角に設置の事は疑あるまじ。

●奉祝に關する協議會　千家知事、松田市長、澁澤商業會議所會頭の三氏發起となり、昨日午後一時より、府知事官房に於て、東宮御慶事奉祝に關する協議會を開けり來會者は、府下の有力者四十餘名、右三氏より、従來打ち合せ來りたる經過を報告したるが、主唱者の間にも、未だ成案の決したるものなく、美術館若くは、公會堂、又は、圖書館設定など計畫區々なるに依り、某氏の發議にて、十五名の委員を設け、右準備に關する諸般の事項を調査せしむるに決し、右の委員指名を千家、松田　澁澤三氏に托し、左の十五名の委員を指定し、外に發起人三名を加へ、來十六日委員會を開く由。

〇豊川良平〇大倉喜八郎〇渡邊洪基〇曾我祐準〇園田孝吉〇中野武營〇中島又五郎〇瓜生震〇山本達雄〇安田善次郎〇益田孝〇馬越恭平〇近藤廉平〇雨宮敬次郎

●田中宮相の寄附　田中宮内大臣北堂の逝去に際し諸家より巨多の贈物供物等ありて、一々之れに答禮する時は隨分巨費を要すべく、且つ殆ど無用の冗費とも思ふ節も多ければ、之を有用の慈善事業に供せんと、故北堂の志にもあり、又其遺言中にもありし由にて、宮相は、最初より葬儀を質素にし、且つ其の答禮の費用に併せて、相當の金額を支出し、諸家へ答禮の代りとして、昨日日本赤十字社感化院其の他慈善事業に金二千圓を寄附したりとぞ

●貞婦　山形縣山形市開業醫音山金五郎氏の北堂秀子(六十二)は、現時同上町に居住し、身体健全起居、壯者も及ばざる程なるが、秀子は、今を去る二十餘年前、夫に永訣し、殘には十六歲の金五郎氏を、頭に五人の形見あり。婦人の身とて、一時は途方に暮れたるも、さすがに秀子は心雄々しくも、五人の我が兒を愛育し、卅有餘年間、清節を持したる婦徳は、今や顯はれて、金五郎氏以下、各々獨立の業を樹るに致り、可愛ゆき孫の顔を眺めて、樂しき餘生を送るに致りしは、偏へに、秀子が、貞操の徳なりと賞へぬ者はあらじとぞ。

●また　茨城縣久慈郡西小澤村にれ金といへる女あり。元端龍邊の生れにて、さすが士族の娘丈けあり、起居動作卑しからず、物言ひもしとかなるにぞ、夫政吉との間、事の外睦しく、已に男女三人の子まで擧けし程なりしが、政吉は正からぬ者にて遂にあたし心を起し、己か妻子をかへり見ず、家を出でたり。杖柱とも賴みたる所夫政吉の出で行きし後は、素より貧しき暮しとて、困難言ふべくもあらざるに、お金は我が身の不幸と諦め、漸

やう繩を綯へ、蓆を織り、又賃仕事抔健々しく働きて、辛くも三人の子を育て貧しき身にも敎育こそ大切なれと、三人の男の子は、日々學校に通はせて、高等小學校を卒へさせたるは、殖生の里にも、稀らしとて、お金の心掛けを褒めたゝへけり。殊にお金が捨てられし頃は、未だ三十の花の散り失せたるにわらねど、自ら守る操の鏡曇らせたる事なく、時にたわくる男子ありとも、決して言をも交へざれど今は再び言ひ寄る者さへなくなりしと。又お金の一子にて、高等科を卒へし某と云ふは、今函館にありて、奉公の傍ら學びの道に出精し、追つては師範學校に入る筈長女の某も去人の媒酌にて、豐かなる人に縁談整ひしも、皆お金が貞操の報いなるべしと感ぜぬ者なしといふ。

●少年の鑑　岡山縣美作國西々條郡芳野村大字古川井場百藏の長男德一(十四)は目今竹田高等小學校の第三年生なり。家至つて貧困なるより、百藏は、德一と、老父とを家に殘し置き、妻や子供五人を連て、大野村大字圓宗寺へ引越し、小枠製造に從事する事と爲せしも、僅少の賃金にて、多數の口を養ふ事とて、日々の生計をも凌ぎ兼ぬるより、德一を退校させ、何か職業に從事せしめ、生計の助にせんと、其の由を言ひ聞かせたる處德一は涙ぐみ、お父さんの仰せゆゑ、忌やとは申しませんが、此からは入用の書物も、授業料も、皆私が働いて稼ぎ溜めを拵らへ、お父さんに御心配は懸けませんから、何卒高等學校丈は卒業させて下さいと只管乞うて已まざるより、百藏も、其の志を憐れみて、遂にこれを許しゝは、今より一年計り前の事なりとか。爾來德一は、學校より歸れば、他人に雇はれて荷車の前挽きを爲し、夜は製紙に要する藁を摘むなど、非常の辛酸を嘗めて、書籍

代授業料筆紙墨等は素より、餘りあれば家計の助けと爲し、日夜の勞働思ひ遣らるゝ程なるに、勤學の志、亦少しも撓まず、熱心に修習すれば、學校の成績、常に優等を占め居れる由。又た過般同校にては、生徒の服制を設け、一般に袴を穿たしむることゝなせるに、可憐なる德一は、一週間の猶豫を乞ひ、漸くにして古袴を購求するを得たりと云ふ。實に感ずべきの至りにあらずや。

●二孝女　一は茨城縣、一は山形縣のものにて、共に善行衆に抜きんづるものあり。孰れも縣知事より賞賜せらる。左に其の賞狀をかゝぐ。

茨城縣北相馬郡大野村
岡田治平妻　岡田ふさ

資性順良能く舅姑に孝事す、夫渡船の船子を業とし、傍ら漁業を爲すも、素より赤貧にして、一家の糊口に急迫を告ぐ、會々姑病に罹り、

四肢自由を缺くや、懇切看護衣食寢具の注意より、排泄物等の始末に至る迄、他人の手を煩はさず。病姑短慮にして、少しく意に適せざることあれば、忽ち叱責を加ふるも意介せず、専心病者の意を迎ふることに勤む。而して、看護の暇あれば、他人の田地を小作し、以て家計を維持し、且つ藥餌甘脆に供す。然れども醫治効なく、志操變せず、辛苦艱難を忍びて、孝養を全ふしたる段、奇特に付、爲其賞金參圓下賜す。

山形縣米澤市福田町
今村幾太郎母　今村つる

稟性温順孝貞の志厚く、年三十にして夫を失ひ、婦道を守りて幼兒を保育し、明治十一年、姑病に罹るや、日夜病褥に奉侍し、湯藥甘旨を進め、丹誠以て看護を盡し、歡を承る、已に廿餘年の久しき一日の如し。洵に奇特とす、依

て、其の賞として、木杯一組を下賜す。

●節婦旌表式　節婦林しげ女は千葉縣香取郡常盤村方田區の產にして、明治元年同郡豐和村大寺區林新藏に嫁し、夫婦間睦しく、能く姑に事へ、同三年に至り、長男重次郎を生めり。然るに不幸にも新藏は同七年より、滿十六年間起臥も自由ならざる重症にかゝり、剩さへ中頃より明を失ひ、介抱益々困難なるに不拘、終始一日の如くに看護怠らず、村民誰れありて女の貞節を稱せざるものなかりしが、新藏は、遂に養生叶ず、明治廿二年に至て歿しぬ。女の悲歎遣る方なく、泣〱野邊の送りを濟まし、爾來偏へに貞操を守り、朝夕まめまめしく家政を執れり。初め新藏病苦に惱み、且つ家計の不如意なるを見て、女の兩親、太く之れを憂ひ、年若き身を以て、斯くも限りなき艱苦を嘗めしむるに忍びず、同家より斷然離縁を求めて、更らに他家へ再縁せしめんと、樣々に言ひ聞かせたれども、女更らに諾なはず「假令今にして、如何ばかり不幸の境遇に陷るとも、縁ありて一旦夫と定めたる上は、爭かで其人を捨てゝ去るに忍びんや、況てや夫は起臥も不自由なる重き病に惱み居れり。妾若し棄てゝ此の家を去らんか、夫は何に依りて、其の病苦を慰むべき。妾は死するとも、決して悔なしと、健氣に答へて應ぜず。孱弱き身を以て、夫の看病より幼兒の教育、其の他の家政を執り居たるは、高等の教育を受けたる婦人に於てすら、なか〱に及ばぬ操行にして、天資善良事理に明らかなるにあらずんば、奚んぞ能く斯くの如きを得んや。道義地を掃へる今日、女の如きは、寔に婦女子の龜鑑といふべし。かゝる節婦の本村より出でしは、實に嘉すべき次第なりとて、日本弘道會豐和支會にては、去月十五日をト

し、入營兵寺本伊助氏の送別を兼ね飯塚小學校に同女を招待し、旌表式を擧げ『表貞操』の三字、裏『豊和支會』の四字を刻せし三ッ組木盃に、金若干を添へて贈呈し、盛んに、其の貞操を旌表せり。

今、其の次第順序を聞くに定刻、先づ小學生徒並びに弘道會員、戰友團員等、無慮二百六七十名着席、次に主賓林しげ女、及び寺本伊助氏着席、幹事開會の辭を述べ、夫れより學校生徒の君ヶ代の唱歌あり、次に教育に關する勅語を奉讀し、次にしげ女に對する左の頌狀を朗讀せり。

頌狀

香取郡豊和村大寺區
亡林新蔵妻
林　しげ子

貞性温良嫁して後能く舅姑に事へ、夫の病に罹るや、實家の父母、之を憂ひ、離別せしめんとするも肯んせず、看護數十年一日の如く、其の任を全うす。實に衆人の模範となすに足る。仍て三ッ組木盃及び金員を寄贈して、其の貞操を表彰す。

明治三十三年二月二十五日

次に入營兵士送別の辭、會員及び生徒の祝辭あり、次にしげ女並びに寺本氏に對する唱歌を奏して、式を終り、一同茶菓を喫して散會を告げたりとぞ。今しげ女に對する唱歌の一節なりといふを聞くに、左の如し。

(一)常盤なる松の緑りは
外の木の葉の露霜に
散りての後に色深し

(二)呉竹の節にこめたるその操
冬の夜ながら降る雪の
かゝりて後に力あり

(三)夫は病めり家貧し
譏るかひなの細くとも
生計をつなぐ二十年

(四)この心こそみさをこそ
松と竹とにくらふべく
やがては人のかゞみなれ

●婦女の龜鑑　廣島縣山縣郡某村の小學校教員

花井沖人の妻ハツ(廿五)沖人に嫁してより肺炎に惱める良人を看護し、傍ら手內職をなして、生計と藥餌の料に充て、日夜寢食を廢して、良人の回復を祈りし甲斐あり、頃日沖人は、漸く全快して、勤務に從ふことを得しが、ハツは、沖人の實弟時之助(十七)が學業熱心にして、中學志願あるを達せしめんがため、尚其の內職を廢せず、日々僅に得る所を以て、時之助の學資に供しつゝありと。

●孝子の自殺　越後新發田の長谷川直太郎(十八)は、祖父竹吉が病死に際し、曾て放蕩の故を以て、離緣されたる實父直吉が來りて、葬儀に加はらんとするを、親戚の某故障を唱へて、之を拒絕したるより、孝心に厚き直太郎は、實父に對する孝道立ずとて自殺す。其の志憐むべし。然れどもいたく其の道をあやまれるを惜む。

●田舍女欺さる　茨城縣結城郡石毛町三十六番地、服部お蝶(三十)は、過る十日午前十一時東京見物にとて、只獨單で出京し芝區宮本町の大神宮社內に參拜し、居る處へ、年齡三十位の男が來て、親切らしく言葉を掛け、彼方此方連廻りし末お蝶が所持の縮緬の衣類三點(代金八十餘圓)入の風呂敷包を、奪ひ取つて、姿を隱せしより、お蝶は青くなつて、芝警察署へ屆け出でたり。此の頃かゝる災にかゝる人甚だ多し。諸媛たちも心すべき事にこそ。

●土人の鷲送り　北海道白老郡社臺村の舊土人等鷲送りと稱する神事を行ふ。其の次第は武裝せる土人　酋長の許に會し、一羽の巨鷲を射て、之れを神前に供す。此の事は土人間熊送りと稱して、土人のために、殺されたる者の靈を神に祀る古例より出で、今は鷲を用ふるに至れりと。

●流行性寒冒の慘毒　世人は黑死病を恐るゝを知

るも、目下流行せるインフルエンザの惨激なるを思はざるは、大に誤れり。今回のインフルエンザは、一旦之に罹る時は、熱度非常に昇進して、四十度以上となり。肺炎、肋膜炎、脳膜炎等を誘起して、終に死に陥らしむる事、其の例少なからず品川、外山、梶野氏等の如き、皆之なり。其の他近頃死亡者の半は、其の原因皆之にあり。又黒田伯、東久世伯、芳川子、田口、田中両代議士の病氣も、同一なりと。去れば、若し少しにても、感冒の氣味あるものは、直に醫師に就て、手當を爲さゞれそ、大なる後悔をなす事あらんと、某醫學博士は語れり。

●懸賞當選の賞品　和歌秀逸二十七首、文十一篇の賞品として、女鑑第二百號一部づゝ、發刊の當日直に、贈呈せり。和歌優等二首、此は、土佐日記燈一部つゝを贈呈せり。文、かねては、二十篇の優を選ぶ筈なりしも、得がたくて、本意ならずも十一篇にて止めたりき。また、鏡には、當選の自ら戒むる詞を彫刻せしめ、硯箱には、當選の慈悲の心をよめる和歌を、文庫には、贈呈のゆゑよしを蒔繪せしむるため、目下、それ〳〵其の道の人に囑托中なれば、是また、日ならずして成工すべく、遠からず贈呈の運に至るべし。たゞ、第一懸賞題については前號及び本號に廣告せる如く延期するの已むを得さるに至れり。幸に、本社の微衷を諒し、奮つて應募せられむことを希望す。





三月五日兼題　歸雁

天　　　栃木縣栃木町園部三十六番地　中島景子

花の香をまたこんまでのなごりとや
　つばさにしめてかへるかりかね

地　　　越後國中蒲原郡小杉村　中川つき子

おぼろ夜の月になくねをゆつりつゝ
　かすみにきゆるはるのかりかね

人　　　肥後國八代郡八代町　田代きわ子

かりかねをしばしとゞめて打日さす
　みやこのはるのはなを見せむや

（以下原稿到着順）

あづさ弓はるにうかるゝこゝろなく
　なごりなすてゝかへるかりがれ　德永鶴子

なれもまたさこよの春なしたふらん
　はなにわかれてかへるかりがれ　吉富彥子

大そらのかすみかきわけつれなくも
　たちかへりゆくあまつかりがれ　佐々小季子

かへりゆく雁のつばさもおもからん
　はなくもり日のくものなみ路は　佐々木隣子

さき匂ふ花な見すてゝゆくかりは
　ふるさといかに戀しかるらん　岡田柳子

さくら花にほへる中なよそにみて
　かすみがくれにかへるかりがれ　岡田蓉子

かすむ夜の月はいりにしやまのはな
　かへりみかちにかへるかりがれ　道家しつの子

はる風にみそらのかすみふきさけて
　のごかにかへるかりのひさむら　蕪木林子

またこんさあきなちぎりてゆく雁の
　こゑもかなしきあかつきのそら　久保文子

ふるさとへかへる雁がれこさづてん
　わがおもひなばおやにつたへよ　久保ふみ子

春かすみこしちのそらにたなひきて
　つれなくかへるかりさゝめてよ　石川久子

のさけくも花さくはるなよそにして
　しつこゝろなくかへるかりがれ　石川類子

今はさてなこりなしげになくくも
　くもかくれゆくかりのひさつら　石川南江子

ふさいでゝ見やれば羽音たからかに
　まだきにかへるかりのひさむれ　深尾千代子

故鄕はかくもこひしきものなるか
　はなをみすてゝかへるかりがれ　小野かつ子

かりがれに惜しむ名殘もきゝすてゝ　小野ひろし子

秋さちざりてさほざかりゆく

ゆく雁ははなきさこなこのむらん
山の端さほく消ゆるかりがれ　小野治の子

さくらさく頃なうしさやおもひけん
かすみにきねてかりかへるなり　國枝すゞ子

つれなかるあめな見じさや雁がれの
はなをそむきてかへりゆくらん　上杉光子

散りやすき花のうき世ないさふにや
さくなもまたでかへるかりがれ　上原八重の子

はるかすみかすめる空にこゑすなり
こし路にかへるかりやなくらむ　梅本ふさに子

さくらさくみやこの春なあさにして
かへるかりのこゑかすむなり　林環子

いかばかりおのが常世のしのばれて
はなのさかりにかりのゆくらん　池江榮子

咲く花な見すてゝかりのゆくみれば
いかにさこよのこひしかるらん　池江もさ子

なれもまた常世こひしかまさかりの
はなを見すてゝかへるかりかれ　池江しげ子

さこよなばいさゞこひしく思ふらん
はなのさかりにかへるかりがれ　宮原ささ子

月花なみすてゝもかへるかりがれは
ゆきふるさとのいかにこひしき　中川あき子

秋さちぎり春にそむけるかりがれは
今日やくも路におもひたつらん　服部倫子

さきにほふ花はかすみのへだつさも
なごかさまらでかりのゆくらん　友永琹子

百さりははなにきなるゝこのはるな
いづこなさしてかりのゆくらん　中山庫子

かへる雁なになこゝろにいそぐらん
はなのさかりなあさにのこして　村崎包子

夕まぐれそれさもみねすはるかすみ
なびくみそらにかへるかりがれ　黒田明子

小夜ふかくれさめにかりの聲すなり
いまやこし路におもひたつらん　黒田美津子

月のかげかすめるはるのおほろ夜に
こゑのみかへるあまつかりがれ　虎口資子

うす墨にかけろ文字さもみゆるかな
かすめるそらなかへるもりがれ　下田龜子

春霞ふかくな立ちそひさかたの
くもぢにまよふかりのこゑ〳〵　鏡山増代子

今はさてみやこのはるなよそにみて
かすみかくれにかへるかりがれ　大竹はつ子

長閑なるはるの山路なよそにみて
かすみかくれにかへるかりがれ　南里佐多子

この頃のはなのさかりなあさにして
なごかりがれのかへりゆくらむ　早川樹子

花も見でないそくらんかへるかり
こしぢはゆきもまたきねなくに　仁保しま子

こさつてんこゝろたのむの雁いかに
鳴きて行くらんふるささのそら　渡邊龍江子

なか〳〵に散るなうしさや行く雁の
はなのさかりにいそくなるらん　小林しげ子

大そらにさも呼びかはしゆくかりの　山田稻子

こゑきへかすむはるのわかれ路

秋ぎりにわけつゝこしのかりがれも
今日はかすみにたちかへるらむ　櫻井和香子

春さめにつばさしほれてゆくかりの
ゆくへこひしき夕まぐれかな　伊藤睦子

こち吹けはふる郷こひてかりがれの
はなにさきたちなさいそぐらん　竹村貞子

咲きにほふ花のみやこをあさにして
かすみに消ゆく春のかりがれ　内海順子

春霞たちそめしよりいまはさて
かへりも行くかあまつかりかれ　八木沼里子

いひしらぬ春のながめもあるものを
つれなくかへるあまつかりかれ　東野さく子

さくはなの春を見すてゝゆくかりは
ふるさといかにこひしかるらん　山方春子

はるの夜の月をみすてゝゆくかりは
ふるさといかにこひしかるらん　大塚小松子

よをこめて歸りわづらふかりがれは
こしぢのそらをつきになく〳〵　根田よし子

なになれば都のはるをふり捨てゝ
はななきさとにかへるかりかれ　輕部壽子

こゑはしてそこさもわかねさよ中に
いづくをやさにかりがれのゆく　高やす子

春の夜のつきさ花さをよそにみて
こし世にかへるかりもありけり　玉井隆子

待ち人のたづねこしかさ出てみれば
くもまをたどりかへるかりかれ　木村菊子

かへるかりこゝろして行け海はらは
八重のかすみのあみそたなびく　田代艶子

のさかなる春のやまへを見わたせは
つらもみたさすかりかへりゆく　田代綾子

うくひすは谷の戸いつるはるこさに
なになこしちにかへるかりかれ　河田いし子

ふりすてゝ行くさはすれささほ姫の
たもさに残るかりのたまつさ　財田富子

天つかりかすみのなかをつらなりて
はなのさかりをみすてゝやゆく　横山すが子

折しもあれ花を見すてゝはるのかり
なになみやこにおもひたつらん　島飼つゝ子

花を見すて常世のくにゝはる〴〵さ
かすみかくれにかへるかりがれ　島伊登子

ちるこさのなきはなゝらば雁がれも
かへるこゝろはあらざらましを　溝口貞子

かりがれの列もみだれすはる〴〵さ
かすみがくれにゆくぞこひしき　小野寺都城子

まてしばし花を見すてゝかへるかり
あきなわすれそわれはまつなり　鈴浦よき子

ふる里のはるなつかしみかりがれの
かすみさゝもにおもひたつらん　萩原ろく子

そらたかく啼てすぎゆくかりがれは
はなをしなりにたちかへるらむ　筑紫春子

さき匂ふはなに名ごりやをしむらん
なきつゝかへるあまつかりがれ　新庄さら子

あふこさのあれば別れのあるものを　江口準子

くもまより聲のみもらしゆくかりは　なほなしまれてかへるかりがれ　尾崎嘉子

ふるさとの春やこひしくいそぐらん　おのがこし路にいまかへるらん　河原芳子

玉あられ降るおと絶ねてふくる夜に　つらもみだしでかへるかりがれ　土居繁代子

かりがれの花のたよりを問もせず　さほくきこゆるかりのひとこゑ　香波愛子

越ぢへと何にいそぐらむみやこには　なにをしたひてたちかへるらん　神村多賀子

思ふとちつばさならべてゆくかりは　はなのさかりのちかくなれるを　青木治子

雲にいりかすみにきゆるかりがれは　はなのさかりもなしまざるらん　上野津愛花子

さやかなる聲をのこしてふるさとに　ふるさとびとにことづてやせん　木村きく子

咲きにほふ花にひとこゑのこしつゝ　かすみをわけてかへるかりがれ　中村さき子

しらゆきのふるさとさしてゆく雁は　こぞしもかへるかりのひとつら　三木瑞子

こむ秋をまつほのうらのゆふなきに　はなのなごりをなしまさるらん　三木まさ子

みやこへの花のさかりをあとにして　こゑをのこしてかへるかりかな　禿澄子

さく花のみやこをたちてゆくかりは　いつこにかりはかへりゆくらん　三宅中枝子

こしのしらねのゆきやみるらん

ものいはゞとひてやみましゆく雁の　はなをみすつるこゝろつよさを　河合縫子

花にゑふひとにそむきてゆくかりの　こゝろたかさそあふかれにける　加藤敦子

はるあきのゆききになれし道とてや　かすむゆふべにかりはたつらむ　服部萬子

かへりみて雁はゆくらむいひしらぬ　なにはのはるのあけぼのゝそら　服部正子

みちすがら花のさかりをみつゝゆく　たびこそかりもたのしかるらめ　伊東千代子

なれがゆく道のさくらはまたおそし　あまりいそぐなかへるかりがれ　伊東いさ子

うちつれて列もたゞしくかへるかり　ひとのこゝろのかゞみとやみむ　吉田政榮子

かへるさの道やかすみにまよふらん　けさかりがれのこゑぞみだるる　藤野聰子

春ごとにふるさとびとにちぎれはや　霞をわけてかへるかりかれ　青木たま子

さよふけて越路をさしてかへるかり　つきとはなとの名こそをしけれ　堀垣しか子

さくらさくみやこの春をよそに見て　いまはとかへるかりのひとつら　山田璋子

たらちねをしたふこゝろのひと筋に　はなをもすてゝかりは行くらむ　西川節子

いかばかりのとけかるらむ春かすみ　たなひくそらをかへるかりかれ　關原つれ子

ふるさとに誰やまつとてさくはなの　岩崎花子

さかりをあさにかへるかりがね

いひしらぬあはれをこめて雁がねも　池山さち子
かすむくも路にたちいりにけり

ふるさとの親たらちねにことつてよ　山里淳子
みやこをあさにいそぐかりがね

草まくらたびをつれなるかりがねも　松川愛子
おのがこし路のはるやこひしき

さくら咲く彌生のそらをながむれば　咲貝雪子
かすみがくれにかへるかりがね

八重がすみ立へだてずば雁がねの　天野あい子
ゆくへのかぎり見おくらましを

ふるさとに花のたよりをつけやらん　深谷清子
しばしはとまれかへるかりがね

ひたすらにふるさとさして歸るかな　浦野時子
はなをもまたでいそぐかりがね

咲くはなを見すてゝかへる雁がねは　新井さよ子
いけのふるすやすみよかりけん

のどかなるみやこの春をよそにみて　森このゑ子
わがふるさとにいそぐかりがね

花までとかすみたなびきとむれども　早川信恵子
こゝろみじかくかへるかりがね

しらゆきのなほふるさとは戀しさに　片山あや子
はなを見すてゝかへるかりがね

行く雁にこゝろなしともおもふかな　宮内さし子
ひとみなはなにかへさわするを

一つらのなかにおくれて行くかりは　戸塚鐵子
はなになごりやをしむなるらん

春の夜のかすめるそらにいつくとも　鈴木かね子
こゑはかりしてかへるかりがね

いかなれば花をもまたでいそぐらん　杉浦いさ子
かすみかくれにかへるかりがね

おぼそらのかすみに消えてゆく雁の　宮田けい子
ふるさといそぐこゑおぼろなり

吹く風のさそふゆくへやうきぐもに　川村淳子
かくれつ見えつかへるかりがね

あき雲にまぎれしかりのはつこゑを　内田さく子
はるのわかれにをしまるゝかな

いましばしまち心みよかりがねの　新井くら子
かへるやま路もはなやさくらん

羣つれてみやこのそらをたつかりも　舘脇ます子
はなにこゝろやのこるなるらん

かりがねもなれし都のなごりさや　吾妻ちか子
かすめるそらになく／＼ぞゆく

なり／＼はくもに聲あるこゝちして　萩原草子
はなまつころにかりはかへれり

なくねのみほのかにもれて明またき　外川益子
かすむくもゐをかへるかりがね

行くかりの羽うつさまはみえねども　上條老子
かすむくもゐにこゑばかりして

天のとを渡るかりがね名にしおはゞ　米津胤子
わがおもふ人にことづてやせよ

きのふけふかすめる空にかりがねの　植松たき子
かへるもかなしはるのあけぼの

つれたちて天の月渡るかりがねは　鍋地きん子

おのがとこよにいそぎ行くらん

春がすみのどかにかすむおほそらを
はなれてかへるかりがねのこゑ　前橋さよ子

ゆふされば二つ三つ四つかりがねの
おのがとこよにいそぎ行くらん　上田しげ子

いまはさて花のみやこをよそにして
くもゐはるかになきわたるなり　柴崎しら子

ゆふぐれに天の戸わたるかりがねは
とこよのくにをさしてゆくらん　尾林よし子

夕ぐれにふるさとさしてかりがねの
くもゐのみちにゆきまどふらむ　奈良橋さく子

春かすみたな引くそらをよそにみて
おのがとこよをさしてゆくらん　相川こう子

いまはさて雲井にまよふかりがねの
うらさびしくもなきわたるなり　白石いな子

住みなれしみやこをよそにうる郷の
とこよのくにゝかへるかりがね　宮部あき子

けさははや花のみやこをよそにして
いづくなるらんかりがねのゆく　北村なを子

春の夜のくもゐにまよふかりがねは
ふるさとさしていそぎゆくらん　小高しげ子

をしめども今はかひなくかりがねは
ひとこゑだにものこしおかずや　横手こう子

かすみたつ雲井にまよふかりがねも
なほふるさとやわすれざるらむ　横手たつ子

春かすみたつを見すてゝゆくかりは
はなのうきよやいとふなるらむ　阪本榮子

花くもりかすみもにほふおほそらを
おぼつかなくもかへるかりがね　持地桃枝子

八重かすみたなびく空にかりがねの
やまのはさしてとほざかりゆく　秋月さく子

今はさてこしぢはるけくかへるかり
なきたにのこせ秋のかたみに　木下千代子

さくら咲くやよひの空をよそに見て
おぼろつきよにかへるかりがね　田村なか子

さよふけてくもゐはるかになく聲は
はなもまたでかへるかりがね　丸木靜江子

をしむへき花を見すてゝゆくかりは
はるなきさとにこゝろひくらん　岡崎千年子

あかつきの雲間をかへるかりがねの
こゑのみきゐてのこるつきかげ　草野さめ子

ふるさとに花をみすてゝかへるかり
またこんあきのちぎりわすれな　高橋かれ子

なつかしき音をのみ殘しはる〳〵と
くも井をわけてかへるかりかな　若代隆子

さかりなるみやこの花をあとにして
こゝろなく〳〵かへるかりがね　川島さく子

なれきゝしかりがね遠くかへりゆく
こし路の友やいかにまつらん　長井福子

はなざかり見すてゝかへる雁がねは
いかにこし路のはるやこひしき　福原苗子

今はさてかきのこしおくかたみかも
ゆくかりがねは文字にみゆなり　井上つさを子

かへりゆく影をはかくすうきくもを　田原美喜子

はかせにはらへあまつかりがね

いまはさてかりかへるなり春かすみ　永山豊子
そらゆくみちにたちもこめなん

誰ありておきてたりけんめかれせぬ　永矢馥子
はなのさかりにかへるかりがね

なれもまた馴したひぢやしのふらん　大海原芳子
うちしなれてもかへるかりがね

こゝろなき鳥とはいへといたつらに　吉田ひさ子
春をみすてゝかへるかりがね

さき匂ふはなもみすてゝゆくかりは　齋藤よし子
ふるさといかにこひしかるらん

ふるさとの花のさかりを見むとてや　松島きみ子
また夜ふかきにかへるかりがね

聲のみをかすむみそらにのこしつゝ　境野愛子
はなをもまたてかへるかりがね

ゆくかりの琴柱はきねてかすみたつ　河野みち子
たかねにのこるまつのしらへか

かすみこそ空へたてけれかへるかり　藤井りゑ子
まれくやなきにこゝろとゞめよ

花の香をつばさにしめてうちなげき　齋藤駒尾子
ふるさとさしてかへるかりがね

花のころみやこをすてゝゆくかりは　椋田凉子
いかにゆきふる里になれけん

夜をこめて月になく〳〵かへり行く　小林しづ子
やもめのかりをおくるはるかぜ

さく花をよそに見すてゝふるさとに　山根久子
たがまつとてかかへるかりがね

花に超きはなにふすらん五百重やま　日高かず子
こしぢにかへるはるのかりがね

いかばかりとこよの雪やなつかしき　高田幽子
はなをもまたでかへるかりがね

來しはるを見捨てかへるかりがねは　岩下ふく子
はなにまされるさとやあるらん

ふるさとに何いそぐらんはるのかり　西川順子
ゆきとちりくるはなもあるよを

ゆきの夜の月をめでにしあまつかり　佐野りう子
はなのあしたになごかへるらん

すみなれし花のみやこをよそにみて　渡邊錦子
こしぢにかへるあまつかりがね

いづくへか雲をへだてゝそむくらむ　原田秀子
春さり來ればかへるかりがね

聲のみをあとにのこしてかりがねの　椎野ぬき子
かすめるそらにきゆるたまつさ

かたときもわするゝまなきふる郷に　武田粲子
かへるかりこそうらやましけれ

ありあけの月をたよりてかへるかり　久住もと子
たが返をかはこぶなるらん

さく花をあとにみすてゝゆくかりの　河方喜代子
こゝろはそらによまれざりけり

霞〻月にほふさくらのさかりをも　富瀬八重子
あとにのこしてかへるかりがね

つれてこし數やもれしさかりがねは　小野操子
なきかはしてもかへるべらなり

今はさてかすみをわけてかりがねの　鵜澤千代子

はなきさにくもがくれゆく　駒澤松子

越路にはよしいそぐとも咲く花に
しばしとゝまれあまつかりがね　道廣彌榮子

うらうらと霞むみそらになきつれて
くもにかくるゝあまつかりがね　伏脇米子

さく花にこゝろのこしてかへりゆく
かりのわかれにつきおほろなり　屋師鈴枝子

あり明のつきのなこりをなしみてや
なくなくかへるあまつかりがね　田山芳子

帶になれたすきになれさささの子の
はやすはかりのかへるなりけり　太田ため子

雲に入りかすみにきゆるかりがねは
わかふるさとを見せじとやする　松野澤子

八重かすみまよひもはてすかへる雁
かみのをしへのみちたどるらむ　安藤類子

ふるさとへ文いそがせておほろ夜の
つきになくなくかへるかりがね　伊藤婦久子

今はさてかすみのころもぬぎすてゝ
はなきさとにかへるかりがね　伊藤よし子

そら高くなく音はかりはきこゆれど
かすみにきえてかへるかりがね　高橋捨尾子

咲き匂ふはなのさかりをよそにみて
こしちにかへるかりのひとつら　牧野花子

こしかたの花をみすてゝゆくかりは
なほふるさとのはるやこひしき　伊藤いく

さやかなるあきの月よにこしかりの
かすみがくれになどかへるらん

いかなれば花のにほひにうとくして
かりはこし路にゆきしたふらむ　田村道子

わたり來しつばめには似す咲く花を
見すてゝかへるかりもありけり　中村きよ子

ふるさとのつとゝや雁もいそぐらし
はなのかほりをはねにしめつゝ　根津禮子

咲きにほふ花にわかれてなくなくも
おのがこしちにかへるかりがね　日吉あさ子

ふるさとのゆきや戀しきはるやまの
はなをばよそにかへるかりがね　戸倉信子

さく花をつばさにかけてゆくかりは
こゝろもたかくくもにこそいれ　熊谷文子

昨日見しあしまのかりもけさははや
くもまかすかにかへりゆくらん　鎌田嘉代子

みるがうちに遠ざかりゆく雁がねの
こゑもろともにくもにかくるゝ　石井豊子

八重かすみ立へだてゝよふるさとに
かりかへるべきみちもなきまで　德永萬壽子

又こんとあきにちぎりてあけぼのゝ
かすめるそらやかりのわかれ路　德永廣子

ふる里にはなを見すてゝゆくかりの
みゆるかぎりはかすますもがな　德永謙子

かりがねのかすみにむせぶ聲すなり
はるにわかれをゝしむなるらん　小森田輝子

うしと思ふ雁のなみだやさそひけん
かへるつばさにはるさめぞふる　中島登美子

かへりゆく雁にことつてあしひきの　飯島いま子

やまのすみかにはゐなしらせん

春かすみたなびくそらにかへるかり
またこんあきを遠しと思はずや　栗田口　のぶ子

さき匂ふはなのみやこをたちいでゝ
ゆきふるさとにかへるかりがね　黒子玉枝子

こんあきを月にちぎりてはるくれは
やがてこしぢにかへるかりがね　磯野こと子

花くもをわけてぞいまはかへるかり
うきよのはなの散るを見じとや　本庄小波子

あさ日かげのどかにかすむ大そらを
なきわたるなりかりのひとつら　志茂郁敬子

咲く花をさもにめてんとおもひしに
つばさならへてかりかへるなり　古川𧶛子

春の夜のかすみにきゆるかりかれは
こゑをしるへにさもやよふらむ　小村脒子

つはものは野の草ふかくふしぬらん
つらをみだしてかへるかりがね　那須昌子

さくらさくみやこをよそにゆく雁は
ゆきふるさとのはなや戀ふらん　横山柳子

三月五日女鑑兼題

二月十一日の日記

天

仙臺市國分町　阪本榮子

つねよりは、とくおき出て、朝戸あくれど、軒毎に、日の御旗、たかくかゝげられぬ。今日こそは、天祖、無窮の皇基をたてさせ給へし、いとも芽出度、祝の日なりけれ。かしこきあたりは、更にもいはず、賤がふせやに至るまで、喜び祝ふは、實にさこそありなめ。さればにや、朝まだきより、學校に通へる童子らも、男をみな打むれて、たのしげに笑ひさゞめき、あるは、聲たからかに「雲にそびゆる高千ほのたかねおろしに草も木も」などうたひつゝ行く樣、都も、ひなも、かはらざらむ。

幾千代もうごきなき代のそのかみを
わふく今日こそ嬉しかりけれ

地

相模足柄下郡箱根町　富瀬八重子

樂しき夢は醒ぬ。やをら起きて、窓押明れば、吹き入る風は、尙肌寒けれど、うらうらと晴れ渡りし、空のけはひは、何となく春めきぬ。茜さす、旭の光は、眞白なる富士を、半ば薄紅に染めて、いと目出度。梅花ならねど、魁せむと、弟の勇みて立てし、旭の旗の、朝風にひらひらとなびく下に、節面白う、君が代を歌ふ乙女子の、衣手には、母が慈愛も見えてなむ。哀れ今日は、綾にかしこき紀元節よ。己れ等學びの式に臨み、歸れる客人

の二三人ありぬ。寄松祝といふ題にて、歌よみつきせぬ君が代を祝せむと、己とりあへず、萬代もかはらぬ松のみどりこそ、君が千歳のしるしなるらめ、とずし今宵は親しき友と、枕並べていねぬ、思へど高き君が御めぐみかな。

人

下谷區御徒町三丁目三十四番地　岡田柳子

軒の雀の千代よぶ聲に、たきいで丶、大空を眺むれた、いと朗にはれ渡れるに、いかに目出たき日ならんと、獨りごちつ丶見れば、妹は早くも衣きかへて、いざ學のやにゆかん。とく朝げの支度調へてよと、立ち騷ぎつ。やがて嬉しげに、天津日嗣の高みくらと、うたひつ丶行く樣のをかしさよ。妾此のよき日に、文机によらんは、心なき業にはあれど、日頃事しげき身、斯る時にてこそと、暫し文よみゐる中、妹の歸りきて、何をかなし給ひしか。ちまたの賑はしさを、見給へね。文よむは、今日に限らざるものを。己案内し侍ればと、しひての言葉に、遂に家を出でぬ。日くれなむとするころかへりき。ちまたのにぎはひかきしるしおかむも、ことごとしくや。

（以下到着順）

德永廣子

二月十二日（午後晴）は、紀元節とて、神武天皇の御位につかせ給ひし日なれば、都もひなもおしなへて、祝かしこみ奉り、いさ目出度おぼゆ侍る。如是萬民のやすらかい、樂しく、日をおくろも、天皇の御惠にうるほひ、御祭さへ、いさおごそかに、仕奉ろさま、にぎはしく、千代萬世さたゝへ侍るにこそありけれ。今日は、大空も風しづかなり。賦曰、

大きみのめぐみのつゆにうるほひて
ゆくすゑながくしげるたみぐさ

佐々有鄰子

明治卅三年二月十一日午前曇午後晴前八時、父母の膝下を辭して、紀元節を別格官幣社菊池神社の式場に於て、遙拜みをへて、歸途、宗梅庵主を訪ふ、茶菓をいだして、歌のむしろをひらく。題は、梅盛。庵主の藤子、

ひさつふたつ御代のさかゆるほゝ笑みて
にほひゆかしくうめのはなさく

妾が歌は

きのふまでゆきにうもれしうめのはな
今日めづらしくにほひぬるかな

後五時、家にかへりて、飯を炊ぐ。

河原芳子

三十三年二月十一日晴　日曜日
あはれ、めでたき日の數はあれど、この年のこの日ばかりめでたくよろこばしきはまたさあらじ。あふぎまつれば、はや三千させのそのかみ、かけまくもかしこき、神武のみかどの橿原の宮に高御座しろしめしけん、いく日のたる日をもて、天つ日嗣さますすめらみこの妃の君をさだめさせたまひ、まづ、伊勢の大宮にここ

つげつかへまつらせたまふと て、勅使參向あらせられ、いとおごそかにそのみまりを行はせたまひけるぞ、またなくたふとくめでたきことのかぎりになん。

けふといふけふはあれども玉くしげ
　ふたゝびかゝるよき日はあらじ

吉田政榮子

あな嬉し、今日は如何なるよき日ぞや。空は、一點の雲もなく晴れ渡れり。軒毎にたてつられたる國旗は、昇る朝日に、きら〳〵と光り輝きて、世界にためしなき、皇統一系の基を開き給ひし、皇祖の御位につき給ひし、世にも尊き紀元節なり。拜賀式終れば、皆々おのがじゝ遊ぶめり。妾はさはる事ありて、そと出もなりがたくて、家居なすも、さすがに、何事も手につかで、新聞紙などひろひ讀つゝゆけば、兼て拜承しつゝありし、東宮殿下の御婚儀の御發表にぞありける。竹の園生の年毎に、榮へます嬉しさかぎりなし。庭の雀の、千代〳〵と囀に、汝も今日の日出度日を祝ひてかとゝはまほしうてなん。悦びかぎりなきと書き綴りて、日記の一ふしとしぬ。

西川錦子

紀元節には、軒毎に朝日のみ旗翻へし、都も鄙もおしなべて、君が代の窮りなきを祝ひ奉らぬぞなき。わきて今年のけふはしも、掛卷も畏き　皇太子の宮の、此度御結婚の御約束成らせ給ひしことを、公に發せられければ、吾等國民たるもの、いかでか、大に祝し奉らでやは。見渡す限り凪靜なる海原に、滿艦飾旗高く揭げたる軍艦の、厳めしげなるも、君が稜威の動きなきを表し、白鷗の三ッ五ッ波を掠めつゝ遊べる樣は、穏かなる御代のためしと、いと長閑なりや。さるにても、かゝる佳き日を徒に過さむはと、終に半日の樂みを鎌倉に分ちぬ。さるは皆、日に月に進み行御代の嘉と、嬉しさの余かつ記しぬ。

福原益子

今日は、わきて、大空ものどかに晴れて、朝日の御旗さへ、門になびきぬ。そもいかなる日ぞと尋ぬれば、うべなりや。紀元節とて今より、二千五百六十年のむかし、皇祖神武天皇、中國に遷御あらせられて、大和國橿原の宮に於て、御即位の大禮をあげさせられ、新に元年を紀し給ひし、大佳節とならびに、わが、　東宮殿下の、御慶事御發表あらせらるゝてふ、いとも〳〵めでたき御日に對し奉ればなりき。家の人々、いづれも、大宮内の御方を拜し、天つ日嗣の御榮天壤の、きはむた無窮と祝ひことほぎ奉るも、げにかしこくてなん。

木村菊子

今日しは、智仁勇に御座しゝ、神武の御帝の御位を、橿原に定めさせ給ひしより、聖明英武に御座します　今上天皇迄、世を代し召し給ふ事、百廿壹代、紀元二千あまり五百六十年の久しきにわたる、いとも目出度き上、兼てより定まらせ給ひつる、いみじき御あたりの、御立妃の御事をも御發布成し給ひし、いよ〳〵尊き喜ばしき吉日は、今日を置きて、いつかはあるべき。されば、己がじゝ、日の丸印の御旗を立てゝことほぎ祭る。特に學友と諸共に、進み行く、我が學の園にも、例に勝りて、盛なる式を擧げられしぞ。やがて歸るさ、四方を見わたせば、何處の松も色深く、兆が上をたどるあしたづも、千代とさゝねつり、八千代と契る。あな目出度、あな嬉ばしう思ふまに〳〵かくがいつけぬ。

小林しづ子

柳も本日は、如何なる日なるぞや。畏くも、綾にかしこき皇國の大君の、御祖にあたらせ給ふなる、『神武の帝の、中原を平げ給へて、橿原に宮柱太しき立て、御位につかせ給へし日とや聞なん。實に

吾國紀元の始とす。爾後星霜を經ること、二千五百五拾余年の久しきに至る、建國の古きこと、世に其の比無き所なり。いさゝか、此の日を祝する意を、謹て記す。

原田秀子

抑二月十一日は、紀元節とて、神武天皇即、神倭磐余彦尊、大和國橿原宮に於て、御即位あらせられ、其の年を日本紀元第壹年と定め給ひし月日なり。

畏れ多くも、天皇陛下には、皇靈殿に於て、御親祭を行はせ給ひ、寶祚の隆んなること、常に天壤と無窮なるを祝はせ給ふ。されば下萬民は、愼みて、紀元節を迎へずばあるべからず。

河方喜代子

掛卷も、綾に畏き、神武の帝の始めて、御位に即かせ給へる、元つ年を、元年と定め、大祝日となして、舞樂など奏せしめ、寶祚の極まりなきを、今上天皇、御自ら親しき、御祭を行はせ給ひ、殊に各爵夫よりは、文武の百官、悉く參拜の式を許させ給はり、位を有つ君達には、御酒を賜はりて、上下とも、いと賑かに、此の貴き御祭を祝ひまつる事の喜ばしさよ。まひて今年は、我が皇太子殿下の、妃殿下さへ、御定まりの御發表あらさられ、畏へに、いや榮へさせ給はんを、うらうらと、吹く春風と共に、異國まで傳へ給ひし、御事我々は、此の貴き、幸ある日を心に記して、忘られぬ紀念日にそあれは、其悦は、四所の袂に包みあへず、斯くは日記となしぬ。

伏脇米子

十一日。晴る。風は眠る眞似して、軒端のみ僅に、戯れありく。雲に聳ゆる高千穂の、高根風に草も木も、靡き伏し劍往昔、神武の帝、畏くも、千代萬代に動なき、國の御柱太敷立てゝ、天津日嗣の高御座、基を固く定め給ひし、雄々しさ有難き、仰ぎ祝はぬものぞなき。かれて契り置きし、玉あひの友垣と、今日の吉き日の樂しさを、歌ひあひ奏でかはし、茶菓などものするうちに、綾なく暮れぬ。打ち集ひ給ひしは、歌にいみじき俊子君、琴に妙なる露子、鈴枝子の刀自撰にて、すべてに至りすくなき己ぞ、主なりける。あはれ、御國に生ひ合ひたればこそと、歸り給ふを見立ながら、感じたるを、忘紀念にいさゝか書いつけ置く。

屋舗鈴枝子

朝未來より、前なる大路を、靴の音の清げに、行きかひし。聞て、後なる學びやに、君が代を、聲高らかに、打上げたる、聞くから心清々しうなん。世には、昨日國をもて南面し、席まだ暖まらぬ今日、頸血を、斷頭臺の露の草に濺ぐさへありと聞くを。さても、往昔、神武の帝、畏くも國の御柱立て給ひしより、櫻の木の彌次々に、皇孫の受繼かせ給ひ、海原なせる、埴安の池の面より、猶廣き惠の波に浴る有難さ尊さ、筆も言も及ばずなん。今日の日を、徒にやはとて、契り置し友許の、歌の團居に侍らひぬ。題は言はでもしるき、今日のよごとになん。燈火の出るに驚き、いざとて月を踏みつゝ歸りぬ。

深尾千代子

二月十一日と云ふ日は昔神武天皇の大和國橿原の宮に於て、即位の禮を行はせられ、我紀元を立てられし月日に相當せるを以て、毎年紀元節として大祝日の中にかぞまへらる。いともよろこばしき日になん侍る。御位に即かせ給ひてより、年を重ぬる事二千五百六十年の永きに及べり。これ、外つ國にたぐひなきためしにて、此の大御代に生れあひ深きめぐみのつゆにうるほふは、いといと有がたき事になん。けふしも二月十一日となりたれば、思ふまゝをかくはものしつ。

岡田春子

空うらゝかに、晴れ渡りて、吹く風も枝をならさぬ今日は、幾代變らぬ紀元節の、印にやあらむ。たて連れたる日の御旗は、風にひらめきて、云ひ知らず床しきに、椽に歸にさり垂れて、行く少女子は、榛見にさ志すにやあらむ。誠や、示樹翁が、君が代は治まりはてゝさ、いはれたるも、諾にて、げに花にのみ騒ぎたちぬる人の心よなど、思ひ出でられぬ。かばかり樂しくよき日を、いでや己れは、文机の許に送らんさ、好める女鑑さりいでゝ見るにも、いよゝ大君のみいずの程推はれて、思ひ及ばぬ雲の上の、けふの御式の事など、推しはかり參らするも、我ながらいさをこなる業なりや。

三月二十日兼題　春の歌

野に山にこゝろのどかにうちむれて
　ゆたかにあそぶみよのはるかな　友永草子

身をわけて見ばや閑かばや霞む日の
　さほやまさくら野べのうぐひす　石井登子

山さそのかすむあしたはかぜさむく
　ひさりはるしろかどのあをやぎ　本庄小波子

花に明けはなにくれゆくはるの日は
　ながくもあらぬゆめのまにして　河原芳子

くれ竹のよごさにさしはかはれさも
　のさけきはゝはかはらさりけり　山方春子

四方八方の殘りのゆきもむらきゐて
　春しりがほにもゆえわかぐさ　原田秀子

ありあけの月もかすみさなりはて
　うめよりしらむはるのやまさき　藤井りゐ子

春くればはなをつま木になりそへて
　うりこゑかをる八瀬のささひさ　河野みち子

つぼすみれ匂へるのへにわがこゝろ
　こてふさなりてけふもくらしつ　中澤千野子

野にあそぶわらはむかへにこし母が
　紙鳶のいさまくはるのゆふくれ　横山柳子

春さめのひさ夜のつゆにめくみ出て
　かきれのもさにすみれはなさく　横山すが子

春の野のすみれのはなのさかりには
　ひばりのさこもなつかしきかな　永井さい子

けふは花あすはわかなさあくがれて
　はるの日はかりたのしきはなし　井上つさを子

ひさ年をかくてもあれなはるの野の
　すみれさわらひつみてあそはん　永山登子

人はみなうさもつらさもわするらん
　はるのけしきのあかぬいろかに　永矢馥子

今日よりは春野のかすみふみわけて
　わか葉つまんささしをささそはん　根田よし子

おもしろきのふは雲見けふは花
　あすかの山のはるのけしきは　大塚小松子

春かぜの吹くさは知らずかはやぎは
　れみたれかみのいさよりかゝる　稲見きよ子

打つゝき野邊は菜のはな咲きみちて
　にほふかぜさへのさけかりけり　米澤なる子

をさめ子は若菜つみつゝあそぶらむ
　かすむはる野にこゑぞきこゆる　岡田春子

歌の庭

ひとひらも散るはなしきを花をみな　かぜのさそふぞはかなかりける　尾倉益子

こゝろなきしづの乙女もはなとりの　しるべにてふむしきしまのみち　山田稻子

草も木もみどりにかへるさまみれば　はるこそひとのこゝろなるらめ　高やす子

笹の根のながきはる日もはなみつゝ　そこはかとなくあそび暮らせり　玉井隆子

うめ笑ひうぐひすうたふ春にあひて　ことはのはなもにほひこそすれ　澁口貞子

花わらひもゝとりうたふはるなれば　ことのはくさもゐや出つらむ　石川頴子

はるはたゞ梅にやなぎにさくらばな　おいなわすれてうかれくらしつ　石川樂子

野に山にあそべるいとのゝどけさに　ことはのはなもさきやいでなむ　石川久子

わがにはの梅のさかりはうぐひすも　ひねもすはなにうかれてぞなく　石川なゐ子

わらひ折りさくらかざして笹の根の　ながきはる日もいとながかりけり　西川順子

うきことはかすみとときゐて花さかり　こゝろのどかにあそぶはるかな　德永篤子

うぐひすの聲もひとつに香りあひて　うめさきにほふやどのゝどけさ　吉富彦子

梅のはな香をなづかしみたづねくる　かきねゆかしきはるのやまざと　佐々小琴子

雲雀なくはるのみそらのゝどけさに　佐々有隣子

すみれのさとはたちもさられず

あま雲の八重かきわけてかすみくる　今日のはる日をむかへけるかな　服部倫子

いとまなき人をもはるはのどかなる　はなのこゝろになしにけるかな　那須昌子

あづさ弓はるたちしより窓のうちに　しづこゝろなくふみをこそよめ　中山庫子

うちいでゝのどかに野べを見渡せば　わか菜つみつゝあそぶをとめこ　村崎包子

君が代はみやこもひなもおしなべて　こゝろのどかにあそぶはるかな　黒田明子

のどかなる四方の春かぜふきそめて　をさまるきみがみよをしるかな　黒田美津子

つばなぬきすみれつみつゝあるは又　さくらがりするそらぞたのしき　虎口資子

山さとにうめやたづねんはるの野に　わか菜やつまんいかにかもせん　下田龜子

若菜つむをとめがそでを吹きかへし　のどかにもあるか野邊の春かぜ　山根久子

てふのとふ畦かき根にきて見れば　なにごともなきくさのくゝたち　道廣やゐ子

わがやどの梅さきしよりあさぼらけ　ふしおもしろくうぐひすのなく　德永萬壽子

青やぎのかづらのさとにうかれきて　さいたつまをもつみにけるかな　德永廣子

うぐひすの聲にひかれてみよし野の　やまのおくなるはなをみるかな　筑紫春子

朝月出にうめが香さそふはるかぜは
かすみのそでやほころびぬらん　小森田輝子

なつかしき梅が香おくるはるかぜに
こゑもにほひてうぐひすのなく　名取よし子

春かぜにふすまもれくるうめがゝの
はなのかほりの身にそしみける　萩原翠子

はなかげに春をくらさんおもふどち
かすみを分けて今日はやまべの　福原蓋子

春の日のひかりのどけくうらく〳〵さ
かはそひやなぎうちけむるなり　林　環子

雲の上にあかるひばりのこゑきくも
はるはこゝろぞそらになりぬる　村上操子

うぐひすに花にうかれて野にやまに
あそぶはるびぞたのしかりける　田村多豆子

春なれや田つらのささのなゝくさも
きのふけふこそあをみそめけれ　田代綾子

花もゑみさりもうたひていひしらぬ
つきもおほろのはるけしきかな　笠原つれ子

かれの音もくもゐ遥かにかすみつゝ
はなよりしらむはるのあけほの　椎野ぬき子

春の夜のおぼろにかすむ月かげに
雪かさまがふ花ぞ咲きしける　神保すゞ子

春くればこゝろいたらぬくまぞなき
はなのにほひをしるべにはして　佐野りう子

花さりに　かるゝこゝろは世の中の
うきをうしさもおもはざりけり　日高かず子

さき匂ふはなの木かげにまさゐして　外川益子

春さいへはたれもこゝろのうき雲を
あそぶもうれしけふのうたぶみ　竹村竹里子

さくら花さけるかぎりはひさこゝろ
はらひてうれしはなのしたかぜ　牧　泳子

野邊にいでゝ若なさわらびつほすみれ
おいもわかきもうかれけるかな　加藤敬子

此ゆふべあかねすみれのはなさこそ
あかねはるひをいく日つみけむ　服部萬子

まなびやをいさみて千葉か歸るまで
あめはしく〳〵ふりいでにけれ　服部正子

もゝさりのさへづる春ののべにきて
いかのぼすべきはるかぜぞふく　伊東千代子

はる深きいけのみぎはのかきつばた
すみれたにほゝつみくらしけり　伊東いさ子

からやまさ花のきみさもたゝへみる
さきつゞきたるつゝじやまぶき　三宅中枝子

あをやぎのいさにのみふくはる風さ
さくらぼたにのはるぞよきさき　河合縫子

やまのはもおぼろに霞むきのふけふ
見つゝしなればうめかをりきぬ　丸木靜江子

野も山もはなさかはりぬはるされば
なくもゝさりのこゑぞのごけき　河方富代子

治まれる御代のはるこそ楽しけれ
ひさのこゝろのあくかるゝまで　藪内つぎ子

春さればはなうぐひすにさそはれて
こゝろのまゝにはなをながめて　新井なみ子

こゝろこそまつうき立ちにけれ

弟妹の健康を姉に報する文

本村菊子

月雪花さては暑さ寒さにつけてよりも、弟妹の成長せしにつけて、先づ思ひ出でらるゝは、姉上樣の御身のことに御座候。ながめづらしきこと聞く御住居よ。定めし醉ひあかせ給ふらむと存ぜられ候へばひたすら又部の樣も御目にかけまほしうおぼえられ候。弟は、雪の朝も風の日も心を讀書に注ぎ、さきつ日の卒業式には、證書片手に賞品かいこみ、嬉しげに返り來し、いさ目出たしとて父母君も祝のむしろを設けられ候。其の後とても聊ほこらふ心もみゐで、ますます學の道にいそしみて、暇あれば妹園子を膝近くへよせ(辨慶は一二三四五六七つ道具を背に負ひ五條の橋できりはひさのさはりはひさのさ)或は猿蟹の話、あるは足もて父母君の年の數、あるは廻らぬ筆をもたせて何かとかゝせなど中々なる樂に御座候。その子も、五月頃の園とはちがふ程すこやかに相成候のみか、忠吉より語られにし話ども、一として忘るゝこともなく、このごろは、伊呂波四拾七字も砂の上には字となりなむほどに、成長いたし候へば、まのあたりに見たまはゞ、いかに喜ばせ給むらむと、御歸鄕の日をのみ待ちあげたてまつり候。かしこ。

岡田春子

軒端の柳打けぶり、鶯のこゑもいとゆかしうおぼゆる候折柄、姉上樣には、いかゞおはしまし候か。庭の梅花は今を盛りと相成候へども、今年は姉君のおはさねば、いかに思はんなど、拙き心にうかひいでられ候。常々み心にかけられて消息おこせ給へる、父母君にも、事なう渡らせられ候へば、御安心下され度候。妹は、常に慕ひまつりて、こそのきのふは姉君と共にひな祝ひしてあそびけるよ。こそのけふは姉君にしたがひて綠ののべに伴はれけるよなど、朝に夕に、忍びぬ候。さはともあれ、妹はいと健やかにて、こぞよりはくす師よびたる事もなく、風邪にだにかゝりし事なくて、學びの道を專一につとめ居り候まゝ、何卒御心を休めさせられ、まなびの業をへ給ひて、あやにしきさいかされつゝ、御歸鄕の日を今よりまち上まゐらせ候。

脇山わか子

長閑けき春の夕まぐれ、故鄕へ歸るかりがねの雲井の空を渡るにも、いとゞこひしさまさるは、去年の春門の柳のうららかに、梅の香ゆかしき我が宿を後にして、はるばると、鳥が鳴く吾妻の都に上らせ給ひし姉君の御上にこそ。隙ゆく駒の足はやみ、早や一とせを、夢の間に過ぎぬる事より驚かれ侍りぬ。此の頃はいかに暮させ給ふにか。花の都に身を置き給ふ事なれば、いかに御樂しみも多からんと思ひ侍り。こゝにはかぞいろの君を始めまゐらせ、何れも變りなう過し侍れば、御心安うこそ。然て、御心にかけさせ給ひし雛子のなやみも、うららかなる春日にとけし池の氷と諸共に、なごりなう消ゆゆき、此頃は、顏もつややかに身も肥ゆふとり侍り。別封の寫眞見そなはさば、去年とは見ちがふまでにや侍らん。又、太郎も、夜に日に勉めし試驗のつかれもなう、いと健かにて、此の頃は日々二人して、野遊びさては花鳥などに浮れあるき、夜ははらから打ちつどひ、慈愛にあまるたらちねの親の惠みにうるほひて、今昔しの物語り、又は姉君の御噂さなど、とりどりに語り樂しみ侍り。太郎露千も、姉君こひしくや。姉君はいつ歸らせ給ふ、我も吾妻の都へゆかまほしなど、常に打ち語らひ侍り。ふつつかながら、妾、姉君にかはり、二人の事は身に引きうけ、何くれと敎へ導びき侍れば、御心安う思し給ひてよ。あなかしこ。

吉田みよ子

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。げに、春は都の中にこそ。近きは上野隅田の花、遠きは飛鳥山向島の櫻、人の心も浮き立つばかりに侍らん。さる處に身を置き給ふ姉君こそ、いかに御樂みも多からんと羨しう思ひ侍り。されど、天さかる鄙のあさぢが宿にも、隔てなきは春げしきにこそ。四方の山邊も長閑にて、かすみの衣立ち渡り、谷より出づる鶯も、軒端の梅にさへづり、氷かさませる朧の細谷川の流れ、琴の音にかよひ、岸の柳のうら／＼と風になびき渡れるなど、又捨てがたき風情に侍り。さて、いつかはと待ちわびつる三郎の卒業試驗も、いよ／＼、今日より始まるとかにて、兼て知らせ給へる如き氣性なれば、夜も日もあかぬばかりに勉め勵みて、こたびは首席にて卒へなんなど、ひたすらいそしみ侍り。やがては、桂をかざして、此の學びのやを出で、姉君の御許へ參りて、名ある學びの園に入りたらんには、草葉のかげにいまするかぞいろにも、いかばかり嬉しう喜ばせ給はんと、一筋にそれのみ思ひ侍り。又松枝事、先年のなやみより、何となう心ゆかぬ氣しきも侍りしが、此うらゝかなる春げしきに伴はれてか、昨日今日は、顔もつやゝかに、身も肥ゑふとり侍り。これもまた、今年の試驗には月の桂を手折らんと、ひたすらいそしみ渡り侍れば、御心安うこそ。なほ萬づは別封の寫眞にて見そなはし給はらば、いかに二人の健かなる氣しきも見ゑ渡り侍らん。あなかしこ。

鈴木さよ子

れもやらず、去年の春かすみと共に故郷をあとに殘して、はる／＼と吾妻の空に立ち出で給ひし御姉上の御面かげ、とかくになつかしう、朝な夕な、御寫眞を取り出し、今はいかにかはらせ給はんなど、はらから打ちつどひ、御噂のみ申侍り。二郎園子もいと健かにて、日々學びの庭に通ひ侍り。よな／＼は、たらちねのことわざし給ふ傍にて、妾ふつゝかながら、二人へ讀み書きなど數へ侍れば、御心安う思し給ひてよ。此の清書は、兩人が、御姉君に贈りまつらんとて、心をこめて書きしものにて侍れば、御覧じ給はり度く候。あなかしこ。

中澤千野子

年の始の祝事終りしより此の方は、何かと打ち紛れ、心にかゝりながらうち過ぎ侍りしに、いつしか雪も消ゑ垣根の梅も氣色立ち侍り。まして、都は嘸か賑かさの花盛り、如何に樂しく詠めさせ給ふらんと、いと／＼羨ましうこそ。此方も皆々わきて幼き人々のいと健やかに生ひ立ち侍れば、御心安う思召し給ひてよ。妹は此度尋常小學を卒へ、弟もいよ／＼入校致し侍り。日々大勇みにて通學いたし居り侍れば、歡び給ひてよ。さても、年浪の流れのいと早きよ。姉君都に上らせ給ひし折は、いまだ母君のひざにむづかりてのみありしが、かくも成人せし有様一と目見せまほしうなん。何ごとにつけても、姉君の御上のみいとゞ戀しう、一日もはやう業なりて歸りまさなんと、せちに祈りまつるになん。なほ聞ゑまほしき事澤なれど、またのたよりにゆづり侍り。あなかしこ。

本庄小波子

あら玉の年たち歸り、春もきさらぎのなかばと相成候。輕風剪々として柳條を動かし、霏雨霏々として殘寒を銷す。梅開きては年の新なるを知り、鶯鳴きては日のうらゝかなるを覺ゆとは、古學の言葉にて、實に睦月の內は、とかくそうぞきたて、日のすぐるをも覺ゑざりしが、月うつるにつれ、いとゞ世はたのしき時候に相成候。姉上樣にはかりそめながらの年始狀差し上げしのみにて、其後事のしげきに紛れ、音つれも絶ゑて致さゞりしが、都の空も、景色直り立ちて、のどかなる空に鳥の聲なども聞ゑて、目に

うるはしき梅の花散りかふ頃と罷り候が、いつも御勉強にて永遊の春日もみじかく思すらむと察しまつり候。省みれば、こぞ恰もきさらぎの末つかた御越しなされしより、今は殆んどひとゝせに相成候が、都の土地にて、四つの時巡り迎ふるは如何御かんじなされ候か。たのしきことの多からむかはり、かなしきことも多くおはさむ。都と申候ても、住みなれし古さとのたらちねの膝下にしく事なしとは承り居り候へども一國の文明は都の地にさきにくるさかやにて、智をみがき見聞を廣くするには、都に増すことこれある間敷と存候。こなたは、兩親を始め弟妹も皆達者にて、それ〳〵御承知の業務をはげみ居候。別して、弟は今年中學に入學するに、入學者多くて選拔試驗行はるゝ由にて一入勉強せざるを得ぬ事とて、大苦みにて、退校後は日々ある先生の御宅に參り、算術をとくに勉強いたし居候間、右御承知下され度候。かしこ。

尙々暑中は御歸郷なさるとの御手紙ありてより、母も妹も、早其の時のこよかしと、指折相まち居候。

河原芳子

のどかなる春の光は、都も鄙もかはりなう匂ひ渡りて、花笑ひ鳥語り、見るもの聞くもの、みなたのしげならぬはなきこの頃、姉上には、いかにわたらせたまふらん。先つ日の消息には、まめやかにて學の業をいそしみ給ふときゝはべりしまゝ、いと心安うすごしはべるを。なほあんぜさせて、おとづれたまはりし御心の深さを、父も母も、みそなはして限なう悦びたまひてなん。健次もはるも、いとすこやかにて、流行の風邪にもをかされずで日々學の庭にたち入りてきそひはげみつ、卒業の免狀いたゞきて姉上にほめられんなど、たのしみてまちはべるぞかし。姉上よ、うからやからに心おきなうつとめ給ひて、この度の試驗すみはべれば、かへりまし、父や母や、はたいとしきかれらにあひてよろこばしたまひてよ。たゞ〳〵、家のことは露ほども勿思ひわづらひ給ひそと、そのことばかりをかくなん。かしこ。

佐々有郷子

大空の霞をわけてかへりゆく、雁のたよりにつけ、太刀のしり玉章を、鹿の命毛を硯の海にこほろこほろにかきなして、姉きみの御やどなる、春風の福岡市の白　館の玉机の御もとにまゐらす。妾が住家の樂園の、弟は健康にして工業學校にかよひて勉學し、妹は女子學校に通學せり。二人とも、いとどすこやかに病といふ病にやせることなく、つとめいそしみて在り。姉君よ、御心おだひにましませ。あなかしこ。

徳永廣子

ひさ〲御音信もうちたえ侍るを、姉君には、はるけき都の空にましまして、親しき御友達とても、諸國の人々のみにて、さぞかし、故郷なつかしく思ひたまふらん。日夜心にかけ侍りつるに、御さはりもなく、學道をおくふかくわけ入りたまふよし、うれしく祝上參る。此方にも、皆ともに恙なくくらし侍り。かねて姉君のいつくしみたまひける弟妹ともに、ことなく日々學道をつとめはげみて、いと健康に日をおくり侍るものから、姉君にも御心やすく思給ふやうにと、筆にまかせてかくは申上ぐるになん。あなかしこ。

福原萬子

あづさ弓、春立ちしよりいとのどかに、草のいほりも晴れやり、鶯の囀づる聲などのをちこちに聞え、心もそゞろうき立侍りし折柄、姉君には、いよいよ、御氣色美しく日々敎の庭に、かよはせ給ふらんとめでたくなん。此方、父母君を始め皆の者一同無事、御心安めてよ、日頃より多病にて、御心にかけさせられし一郎も、此の頃はいとあねかになり侍りて、大分肥りまゐりき。一郎な

ごは去月より、三十町ばかりもある學校へも徒歩にて通ふ樣に相成り、さるが故いよ〳〵身もすくやかにて、日々學びのいさま家にて、劍舞などご敎へもらひ侍り。友ごち三人四人打つごへて、子も母君の御元に御敎を受け、時には霞わけて山邊の花にあくがるゝてふ氣色のよさ、何卒御心平におぼし給ひてよ。庭の梅花も今みさかりに侍り。試驗休暇も可なりおはし玉ふやうなれば、歸り玉ひて、われらのすこやかなるを見そなはしてよ。四月よりはわれも姉君のおはす學校へ行かまほしさたのしみくらし侍るになん。かしこ。

河方喜代子

まがきの梅もほころびて初めて、あたりのどかに成りゆく折から姉上君には日に月につゝがもなくて、學びのわざにいそしませ給ふらんこひたすら、いはひ上奉りぬ。扨、此方たらちねの御上は申すも更なり。久雄千代子も、まだきに起きて學び屋にのぼり歸り來てはふたりいさ樂しげにふく習しなはれば、庭におりたちて、おのがさま〳〵の遊びに余念もなく夜に入れば姉君のうわさなのみし、早うおほきう成りて姉君の如く學び屋のたかきにのぼらまほしさて日をおくるが常なりここに、久雄は此の月の休かくけんさに甲のしるしを受つさて一方ならぬ喜びにてなんされば、千代子も兄上におさらじさて家の内のさうじなごいさまめ〳〵しう立ちはたらき、此の日頃は姿などは及びも得ぬ迄にこねふさりてなん。三人さも、睦ましうたらちねの君につかへ奉りぬればは姉上君には御心易う思ひて一日も早うわざをへて歸りきまさんをれぎまつるになん。かしこ。

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所

姓名

……………
……………
……………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所

姓名

……、……、……。……
……、……、……。……
……、……、……。……
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。

第一懸賞應募期限延期に就きて

第一懸賞題　**地方に於ける婦人會の規則**

▲右應募期限を延期して四月三十日限とす

▲發表は全五月廿日發刊の女鑑にて

▲應募者は總べて女鑑百九十七八號に掲載せる應募者心得によるべし

▲延期は再びせらるゝことなし必ず其の期に後れざらむことを要す

目下の急に應ぜむがため、善美なる地方に於ける婦人會の規則を江湖に求たりしが、幸にして募に應ぜらるゝもの三十余。いづれも皆熱誠を注ぎ、其題目の主意を盡されたり。然れども、この種の重大なる問題としては、其の募集の期限甚短かりしが如し。即ち、應募者は都下若しくは近縣の人々にのみ多くして、少しく隔りたるよりは僅に二三の應募に接せしのみなりき。蓋し、之を審查し發表する曉には、之によつて婦人會の創設せらるゝ地も尠からざるべきを信ず。

然るに、今應募到着せるのみにて查定せんは、この重大なる問題に對して遺憾なき能はず。よりて茲に應募期限を延期して、四月三十日とし、更に汎く應募を求め、猶多數の善美なる規則を得んとす。是れ此の問題の當今女子教育に關係する所重要なるを信ずればなり。大方諸賢幸に其の意を諒し、奮つて應募せられむことを希望す。

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

五版

定價金貳拾錢　郵税金四錢　郵劵代用一割増

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや七版忽ちに賣盡し八版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を説く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり今や四版賣盡し五版成るに至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を掲げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

目次

日本婦人

其の体裁の高尚優美なるは云ふ迄もなく全紙の記事最も女學教育及婦人社會に必要なる論説、學苑、家庭、彙報、質疑、應答、法禮、文藻、小説、叢談、買物案内等各欄一として有益ならざるはなし毎月一回發刊定價一部金拾五錢郵税一錢なり

特約販賣店は東京神田區表神保町**東京堂**なり

本協會の主意書幷本會に附屬する實踐女學校女子工藝學校等の規則は郵劵貳錢を添へ申越しあれば直に送る

補欠生徒募集

來る四月の學年度に於て左の補欠生徒を募集す入校志願の方は本月三十一日迄に履歴書相添へ本協會事務所へ申込あるべし

實踐女學校

第二年級　二十五名

第三年級　二十名

第四年級　十名

附屬下婢養生所

生徒　十五名

女子工藝學校

裁縫科第一年級四十名

造花科第一年級三十名

刺繡科第一年級二十名

編物及レース科十五名

押畫科第一年級二十名

東京麴町區元園町二丁目

帝國婦人協會

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分

金銀摺彩色表紙大和綴優美

定價金二十五錢
郵税金六錢
郵券代用一割增

曩に三輪田刀自我邦女子道德の頹敗に赴く日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し六版七版猶需用を充たすに足らず賣盡せり女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や改正條約實施外人雜居の曉に際し益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切なり、今回同女史の訂正を請ひ茲に新に八版成るを告ぐ冀くは世の婦女達の一讀を望で已まざるなり

目錄

男爵高崎正風序
本居豐穎序
故富士谷御杖述

土佐日記燈

菊版大和綴優美全三冊
自一卷至八卷紙數壹千百頁

定價　金壹圓五十錢

郵送料〔四積郵便三十錢〇小包十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外廿四錢〕

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書おほかるが中に燈といふもの古事記燈萬葉集燈は翁か在世の頃に摺り卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の粟田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること玆に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらず、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと[illegible]繁なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からさる最良書なり

三刊

家庭の鑑

菊版美本 全一冊

定價金拾八錢 郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の敎育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

東京市京橋區築地二丁目廿一番地 （電話新橋八八）

發行所 國光社

女子高等師範學校教授從六位武田錦若序 ●● 國文研究會編輯

高等女學新讀本

全八冊

卷壹貳上下壹冊 各金貳拾錢宛

卷參四上下壹冊 各拾八錢宛

或人曰く本邦の中等教育は半身不隨の片輪なりと、蓋從來此の教育は、概男子半身の專有物たれこなり、今や高等女學校令發布せられしより、漸此の不具教育の譏を免れんとす、是に於て女學校教科書出版の必要大に起る、中にも國語教科書の如きは、殊に男女各別に編輯すべきの要用なる事は、識者の夙に了知する所なり、然るに現今其の書冊に無きを以て、已むを得ず、中學校目的の用書を採用すと雖、勇悍義烈等の事項、男子に必要にして女子に適切ならざる事多く、又、古人の文を抄出したる中には、當今の時勢情況に疎き嫌ひありて實用甚少く、且新令の程度には高尚に過ぐる等、不適合の事項一にして足らず、是を以て、今回、多年女子教育に從事し、女子の禀性心力を熟知して、授業經驗に富める諸氏の集合せる國文研究會に、編輯を依賴し、本書高等女子新讀本を出版せり、其の編輯上に注意せられし大略は、各般の事項、當今實地に適合せるものを撰び、温良貞淑等女德を養成すべき事、家政經濟等婦人として必要の事どもを集め、又歷史地理等すべて他學科に關するものは、其の連絡を圖りて之を省き、且文体の難易雅俗を參酌し、作文模範となるべき文章及和歌をも交へ載せて、文學の趣味を悟らしむるを務め、成べく其の授業時期に當れる季節のものを集めたり、又學年週時を圖り、一學年に一卷を授けて充分會得せらるゝ紙數とし、高等女學校國語科の爲にせしものなれど、女子師範學校等の教科書にも適用せらるゝ樣に毎卷必完結せり、本書は斯の如く注意編輯せられたるものなれば、世上未其の類を見ず、其の教授に適合し其の程度に相應せる事、彼の中學用書の枘鑿相容れざる如き比に非るは、固より喋々を要せず、大牢の味も喰はざれば、其の美を知る能はず、本書も試みて、後其公言ならざるを知り玉へ、

專賣所　大阪南區心齋橋通壹丁目　**松村九兵衛**

專賣所　東京南傳馬町壹丁目　**吉川半七**

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

三月廿日

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來信は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	
一冊	拾錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊前金(半年分)	壹圓
全國無逓送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十三年三月廿四日印刷
明治三十三年三月廿五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木頁雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

寶石入指環



(一) ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價八十五圓◎乙價七拾五圓 全眞珠及チャパール入甲價參拾五圓◎乙價參拾圓

(二) ダイヤモンド入甲價參拾圓◎乙價貳百八拾圓

(三) ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓◎乙價百圓

(四) ダイヤモンド入甲價貳百圓◎乙價百七拾圓

(五) ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓◎乙價百貳拾圓

(六) ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓◎乙價百七拾圓◎全ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓◎乙價百五拾圓

(七) ダイヤモンド入甲價百八拾圓◎乙價百五拾圓◎全ルビー及サツノアヤ入甲價九拾圓◎乙價四拾參圓

(八) ダイヤモンド入甲價五百圓◎乙價四百參拾圓
眞珠入甲價參拾圓◎乙價貳拾五圓

◎市外逓送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶石ヲ装嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覧下サルカ郵便ヲ以注文ナレハ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ示シ代金御送附アレハ其價ニ相當ノ品ヲ撰擇シテ調進スヘシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（當店商品中時計ニ限リ三十日間）以内ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應シテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊店ノ店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類貴金屬美術品商

天賞堂



妙技一等牌賞

天賞堂小川町出張所 東京神田小川町（電話本局二一六〇）

天賞堂横濱出張所 横濱尾上町五丁目（電話八七六）

天賞堂大阪出張所 大坂心斎橋北詰（電話東七三三）

天賞堂名古屋出張所 名古屋市玉屋町二丁目

天賞堂廣島出張所 廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂熊本出張所 熊本市上鍛冶屋町十番地

天賞堂長崎出張所 長崎市今鍛冶屋町四十番地

天賞堂福岡出張所 福岡市□口町榮屋方 臨時

天賞堂小樽出張所 北海道小樽色内町越中屋方 臨時

（印刷所　東京國光社印刷所）